



公益社団法人 全国大学体育連合
Japanese Association of University Physical Education and Sports

The 2nd Forum of The University Physical Education and Sports Studies, 2014

第2回大学体育研究フォーラム

会期：2014年2月27日（木）・28日（金）

会場：武蔵野美術大学鷹の台キャンパス

MAU
武蔵野美術大学
Musashino Art University

第2回大学体育研究フォーラム

目 次

目次	1
主催, 期日, 会場, 実施内容, 協賛	2
大会組織	3
専務理事, 実行委員長挨拶	4
大会日程	5
会場への交通案内	7
会場案内	8
参加者へのお知らせ	9
発表者へのお知らせ	10
発表プログラム	11
調査報告	13
発表抄録 (研究報告, 事例報告, ポスター)	14
ワークショップ	35
ラウンドテーブル	39
研究委員募集	45
「大学体育学」投稿規定	47

主催，期日，会場，実施内容，協賛

【主 催】

公益社団法人全国大学体育連合

【期 日】

2014年2月27日（木），28日（金）

【会 場】

武蔵野美術大学鷹の台キャンパス
（東京都小平市小川町 1-736）

【実施内容】

大学体育に関する調査報告，研究報告，事例報告，
ポスター発表，ワークショップ，ラウンドテーブル

【協 賛】

学校法人武蔵野美術大学

大会組織

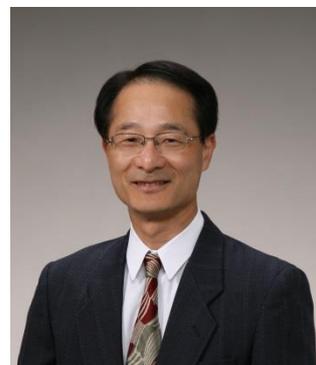
【実行委員会組織】

<u>実行委員長</u>	北 徹朗（武蔵野美術大学）
<u>総務</u>	北 徹朗（武蔵野美術大学），小林勝法（文教大学）
<u>抄録編集</u>	中山正剛（別府大学短期大学部）
<u>参加発表申込</u>	安部久貴（東京工科大学）
<u>進行・座長</u>	橋口剛夫（帝京科学大学）
<u>ラウンドテーブル</u>	木内敦詞（大阪工業大学）
<u>会計</u>	高橋宗良（杏林大学）
<u>WS企画</u>	田原亮二（名桜大学）
<u>受付</u>	飯田路佳（十文字学園女子大学）
<u>会場</u>	北 徹朗（武蔵野美術大学）

専務理事，実行委員長挨拶

全国大学体育連合専務理事 小林勝法（文教大学学長補佐・教授）

第2回の大学体育研究フォーラムを，昨年よりも多数の発表を得て開催することを大変喜ばしく思います。1991年の大学設置基準等の大綱化以降，20数年にわたり大学教育改革は進展し，大学体育を取り巻く環境も激変してきました。特に近年では，大学のユニバーサル化が進み，多様な学力や修学歴，心身の状況などをもった学生が大学で学んでいます。「教育の質保証」と言われるように大学の教育力の向上が社会から求められていますが，そのような要請に真摯に応えようとされている体育教員がこのように多いことを頼もしく思います。



第1回に引き続き，今回も武蔵野美術大学が会場を提供し，協賛もしていただきました。心より感謝申し上げます。また，同大学の北徹朗実行委員長をはじめ，本フォーラムの運営を担ってくださっている委員の皆さんに深く感謝します。この研究フォーラムが大学体育の発展に寄与することを期待しています。

第2回大学体育研究フォーラム実行委員長 北徹朗（武蔵野美術大学）

この度，第2回大学体育研究フォーラムの実行委員長をおおせつかりましたこと，光栄の至りと存じます。前回に続いて本学を会場に開催されますことも大変嬉しく思います。今回から「ポスター発表」や「ラウンドテーブル」などの新企画が加わり，さらに活発な議論が期待できるプログラム構成となっております。この機会に多くの皆様と情報交換をされ，広く交流して頂ければ幸いに存じます。



所謂，2018年問題を控え，大学業界は激動の時代に入ったと言われるほど厳しさをましてありますが，本会が大学体育や教育実践において実りあるものになることを願っております。

本会開催にあたり，公益社団法人全国大学体育連合役員の先生方および実行委員の先生方，ならびに関係各位には大変お世話になります。厚く御礼を申し上げます。

大会日程

期日：2014年2月27日（木）、28日（金）

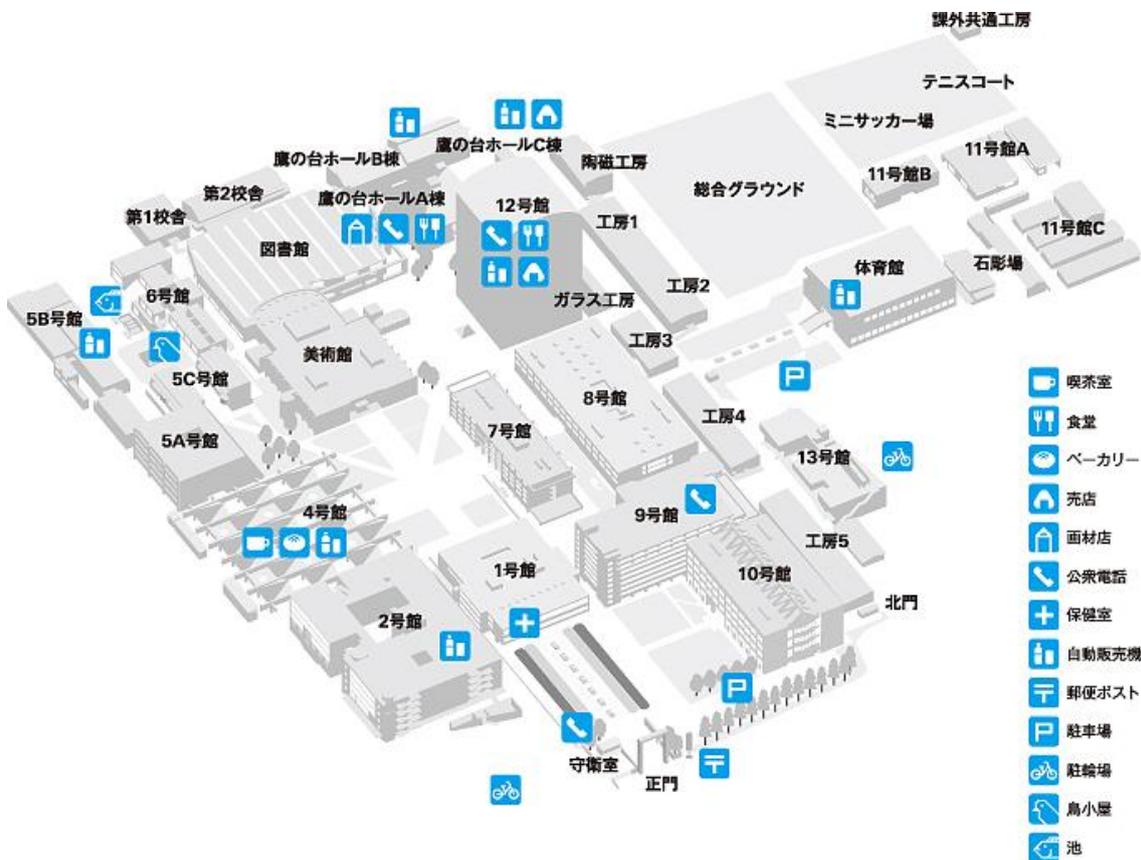
会場：武蔵野美術大学鷹の台キャンパス（東京都小平市小川町 1-736）

2月27日（木）

時 間	プログラム	場 所
13:00～13:30	受付	体育館 103 教室
13:30～13:50	開会式	体育館 104 教室
14:00～14:20	調査報告：「運動部活動実態調査」 演者：北徹朗（武蔵野美術大学） 座長：高橋宗良（杏林大学）	体育館 104 教室
14:25～15:55	研究報告：1 演題 15 分（質疑応答含む） No. 1～3 座長：西脇雅人（大阪工業大学） No. 4～6 座長：中山正剛（別府大学短期大学部）	体育館 104 教室
16:05～17:50	事例報告：1 演題 15 分（質疑応答含む） No. 1～4 座長：佐々木敏（北星学園大学） No. 5～7 座長：服部由季夫（星槎大学）	体育館 104 教室
18:00～18:35	ポスター発表：1 演題 5 分（質疑応答含む） No. 1～4 座長：角南良幸（福岡女学院大学） No. 5～7 座長：橋口剛夫（帝京科学大学）	12 号館 8F MAU
18:40～20:30	情報交換会	12 号館 8F MAU

会場案内

【武蔵野美術大学案内図】



【主な使用会場】

受付：体育館 103 教室

開会式：体育館 104 教室

調査報告：体育館 104 教室

口頭発表：体育館 104 教室

ポスター発表：12号館 8F MAU

情報交換会：12号館 8F MAU

ワークショップ：剣道場

ラウンドテーブル：RT1「教育・スポーツ施策」（剣道場），RT2「ICT 利用授業開発」（体育館 104 教室），RT3「オリンピック・パラリンピック」（身体運動文化実験室），RT4「キャリア開発」（体育館 103 教室），RT5「運動部活動指導」（柔道場）

参加者へのお知らせ

○受付

受付につきましては、体育館 103 教室に設けます(2日目の午前中まで設置)。受付の際、参加費をご準備の上、事前申し込みがお済みの方は、「事前申込者」受付にてネームカードをお受け取り下さい。事前の申し込みがお済みでない方は、「当日受付」にてネームカードをお受け取り下さい。

○ネームカード

氏名及び所属をご記入の上、フォーラム期間中は会場にて必ず着用してください。

○参加費及び情報交換会参加費

参加費は以下のようになっております。また、情報交換会参加費は 3,000 円となっております。

大 体 連 会 員：(～2/1 の申し込み) 2,000 円，(2/2～の申し込み) 3,000 円

大 体 連 非 会 員：(～2/1 の申し込み) 3,000 円，(2/2～の申し込み) 4,000 円

大 学 院 生：(～2/1 の申し込み) 1,000 円，(2/2～の申し込み) 2,000 円

○情報交換会

情報交換会は、12号館 8F MAUにて行います。当日の申し込みも可能ですので、沢山の参加をお待ちしております。

発表者へのお知らせ

口頭発表者（研究報告・事例報告）

1. 1 演題につき、**発表 12 分、質疑応答 3 分の計 15 分間**です。**10 分、12 分、15 分**に合図をします。発表時間の厳守をお願いいたします。
2. 抄録集の他に配布資料が必要な方は **80 部**ご用意ください。
3. パソコンは事務局で用意しますので、発表データをコピーし、**発表前（研究報告の方は、14:10 までに、事例報告の方は 15:50 まで）に動作確認**を行ってください。
4. 学会終了時にデータは責任を持って消去いたします。発表と発表の間の時間があまりございませんので、別のパソコンのご使用はできる限り避けていただきたいと思います。都合上、どうしてもご自身のパソコンを使用されたい方は事前にお申し出ください。
5. パソコンの動作環境は、**Windows7・Power Point2010** です。なお、発表に際して、OHP は使用できません。また、動画を使用される方は **WMV 形式** でお願いたします。
6. 次演者は指定の場所に着席してください。
7. 発表に関して不明な点は、編集担当の **中山正剛（seigou@nm.beppu-u.ac.jp）** までお問い合わせください。

ポスター発表者

1. 1 演題につき、**発表 3 分、質疑応答 2 分の計 5 分間**です。進行は座長がいたします。
2. ポスターのサイズは、原則『**A0 タテ（841mm×1189mm）**』とさせていただきます。
なお、掲示用のテープなどは事務局の方で準備いたします。

発表プログラム

【調査報告】14:00～14:20 <質疑応答を含む>

座長1 高橋宗良(杏林大学保健学部)

調査-1	14:00～14:20	運動部活動実態調査
○北徹朗(武蔵野美術大学身体運動文化研究室)		

【研究報告】14:25～15:55 <発表12分 質疑応答3分>

座長2 西脇雅人(大阪工業大学工学部)

研究-1	14:25～14:40	大学体育における必修授業と選択授業の比較から見たライフスキル獲得の実態の検討
○東海林祐子(慶応義塾大学総合政策学部), 永野智久(慶応義塾大学総合政策学部), 加藤貴昭(慶応義塾大学環境情報学部), 村山光義(慶応義塾大学体育研究所), 野口和行(慶応義塾大学体育研究所), 村松憲(慶応義塾大学体育研究所)		
研究-2	14:40～14:55	大学体育授業の持続効果に関する研究—2年後の運動習慣と学力関連スキルに着目して—
○中山正剛(別府大学短期大学部), 田原亮二(名桜大学人間健康学部), 神野賢治(金沢星稜大学人間科学部), 丸井一誠(精華女子短期大学), 渡邊正和(福岡大学スポーツ科学部)		
研究-3	14:55～15:10	大学体育実技が学生の自己効力感・社会的スキルに及ぼす効果について
○村山光義(慶応義塾大学体育研究所), 村松憲(慶応義塾大学体育研究所), 野口和行(慶応義塾大学体育研究所), 東海林祐子(慶応義塾大学総合政策学部)		

座長3 中山正剛(別府大学短期大学部)

研究-4	15:10～15:25	大学生の体格に対する自己評価と実際の体格について
○角田和彦(北星学園大学), 星野宏司(北星学園大学), 佐々木敏(北星学園大学)		
研究-5	15:25～15:40	大学体育授業時間内の歩数を効果的に増大させる方法の検討—無作為割り付け介入試験—
○西脇雅人(大阪工業大学工学部), 木内敦詞(大阪工業大学工学部), 中村友浩(大阪工業大学工学部)		
研究-6	15:40～15:55	FD診断シート(個人版)による大学教養体育教員の実態調査
○小林勝法(文教大学), 木内敦詞(大阪工業大学工学部)		

【事例報告】16:05～17:50 <発表12分 質疑応答3分>

座長4 佐々木敏(北星学園大学)

事例-1	16:05～16:20	大学体育授業におけるバスケットボールの指導—レイアップシュートの技能習得場面について—
○益川満治(日本体育大学), 園部豊(日本体育大学)		
事例-2	16:20～16:35	通信制大学における体育授業の実践と課題
○服部由季夫(星槎大学共生科学部)		
事例-3	16:35～16:50	大学体育における合気道授業の改善には何が必要か?—受講生の自由記述による探索的検討—
○園部豊(日本体育大学)		

事例-4	16:50～17:05	スノーケリングを利用した水泳授業のプログラムと効果について—初心者から競泳部までの属性による比較検討—
○遠矢英憲(名桜大学人間健康学部), 田原亮二(名桜大学人間健康学部)		
座長5 服部由季夫(星槎大学共生科学部)		
事例-5	17:05～17:20	大学体育授業を通じた自己への気づきを促す方法論の開発～アイスブレイクの利用～
○飯田路佳(十文字学園女子大学), 田中安理(専修大学非常勤講師), 多田五月(帝京大学), 清水文子(十文字学園女子大学非常勤講師), 伊東泰子(日本体操研究所)		
事例-6	17:20～17:35	テレマークスキーの指導に関する教材の作製
○佐々木敏(北星学園大学), 角田和彦(北星学園大学), 佐藤徹(北海道教育大学岩見沢校), 古市竜太(マウンテンガイドコヨーテ)		
事例-7	17:35～17:50	ロシア武術システムを教材とした大学体育の授業が心身に与える影響について
○小山陽平(茨城キリスト教大学非常勤講師)		

【ポスター】18:00～18:35 <発表3分 質疑応答2分>

座長6 角南良幸(福岡女学院大学人間関係学部)

ポ-1	18:00～18:05	大学ゴルフ授業における家庭学習教材開発の試み
○橋口剛夫(帝京科学大学総合教育センター), 北徹朗(武蔵野美術大学身体運動文化研究室)		
ポ-2	18:05～18:10	身近な素材を利用したゴルフスイングづくりのための教材作成の提案
○高橋宗良(杏林大学保健学部), 北徹朗(武蔵野美術大学身体運動文化研究室), 松林幸一郎(亜細亜大学)		
ポ-3	18:10～18:15	身近な素材を利用した教具の自作と授業実践—フライングディスク授業の一例—
○北徹朗(武蔵野美術大学身体運動文化研究室)		
ポ-4	18:15～18:20	フライングディスクを用いた「キャッチビー」の紹介
○神田亮(別府大学短期大学部)		
座長7 橋口剛夫(帝京科学大学総合教育センター)		
ポ-5	18:20～18:25	大学体育実技における学生の意識調査—初回授業と最終授業との比較—
○浅井泰詞(桐蔭横浜大学非常勤講師), 高野千春(平成国際大学), 賤機徳彦(桐蔭横浜大学), 田中幸夫(東京農工大学), 村上秀明(桐蔭横浜大学)		
ポ-6	18:25～18:30	大学・短期大学における障害学生に対する体育実技の現状と支援に関する取り組みについて
○栗原浩一(筑波技術大学), 及川力(筑波技術大学), 天野和彦(筑波技術大学), 香田泰子(筑波技術大学), 中島幸則(筑波技術大学)		
ポ-7	18:30～18:35	障害者スポーツに対する女子学生の意識に及ぼす影響～専攻学科および運動経験の関係について～
○角南良幸(福岡女学院大学人間関係学部), 鍵村昌範(健康支援研究センター), 下園博信(九州共立大学スポーツ学部)		

調査報告

1 日目：14:00～14:20（体育館 104 教室）

運動部活動等における体罰・暴力に関する調査報告

全国大学体育連合 運動部活動等における体罰・暴力問題ワーキンググループ

北徹朗（武蔵野美術大学），小林勝法（文教大学），

高橋宗良（杏林大学），中山正剛（別府大学短期大学部）

<調査対象>

2013 年 9 月 1 日から 10 月 31 日の期間，全国の大学・短大生 3957 名を対象にアンケート調査を実施。

発表抄録（研究報告，事例報告，ポスター）

2月27日（木）14:25～18:35

【体育館 104 教室】

14:25～16:00 研究報告 6 演題

16:05～17:50 事例報告 7 演題

【12号館 8F MAU】

18:00～18:35 ポスター発表 7 演題

大学体育における必修授業と選択授業の比較から見た ライフスキル獲得の実態の検討

○東海林祐子, 永野智久, 加藤貴昭, 村山光義, 野口和行, 村松憲 (慶應義塾大学)

キーワード: ライフスキル, 必修授業, 選択授業

目的

本研究の目的は大学体育授業における受講形態の違いによりどのようなライフスキルを獲得できるのか、

その実態について検討することを目的とする。

全国の大学で必修科目として体育授業を取り入れる大学が 2005 年度には 71.1% まで回復し、スポーツを通じた社会的スキルの獲得にその効果を期待する大学が増加していると考えられる。こうしたなか、東海林ら (2012) によると、大学体育の必修授業では単元前のライフスキル獲得レベルの違いにより、スポーツを通じたライフスキル獲得のプロセスが異なることが報告されている。すなわちスキルレベル高群ではもともと持つ高いライフスキルの適応のために新たなライフスキルの獲得は見られないことやスキルレベル中群やスキルレベル低群では受容感を引き出すプログラムによって、コミュニケーションスキルを有意に向上させることが明らかになった。こうした特性を考慮しながら授業プログラムやコーチングを実施する必要がある。一方、選択授業では実技を選択しない学生と比較してメンタルヘルスの維持や社会参加能力の向上に寄与する報告がある (村山ら, 2012)。これら二つの必修授業と選択授業を対象にした報告からそれぞれに獲得するライフスキルにどのような違いがあるか、その実態や特性を明らかにし今後の体育授業のあり方を検討することとした。

方法

対象 神奈川県内における私立大学Sキャンパスの体育授業 (必修) を履修する1年生26クラス617名 (男性390名・女性207名: 平均年齢18.6±0.4歳) と私立大学Hキャンパスの体育授業 (選択) を履修する1年生

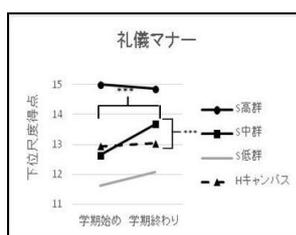
6クラス148名 (男性93名・女性55名: 平均年齢18.8±0.6歳) を対象とした。

ライフスキル評価尺度による自己のライフスキルの認識

介入プログラムは、授業の5回目と授業最終回にライフスキルの評価尺度を実施して自己のライフスキルの評価を行うこととした。評価尺度は島本ほか (2012) を参考に『ストレスマネジメント』, 『目標設定』, 『考える力』, 『感謝する力』など10尺度44項目であった。

結果

Sキャンパスの3つのスキルレベル群とHキャンパスのライフスキルの獲得レベルうち『礼儀マナー』

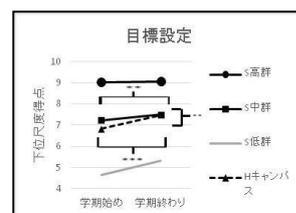


(F8.16, $p < 0.001$), 『目標設定』 (F3.83, $p < 0.01$), 『感謝の気持ち』

(F5.33, $p < 0.001$), 『考える力』 (F3.99, $p < 0.01$)

で交互作用が見られた。

必修授業では『礼儀マナー』, 『感謝の気持ち』が事後に有意に向上し、選択授業では『目標設定』



が事後に有意に向上した。

考察

必修授業では様々なスキルレベルの学生が関わりあうなかで獲得されるスキルが、選択授業ではスポーツ技術の獲得に向けた明確な目標設定に関するスキルが確認された。これらの結果は授業形態の違う体育授業の課題を明確にしたものであり、ライフスキル獲得の段階を考慮した授業のプログラムを作成するための重要な示唆となろう。

大学体育授業の持続効果に関する研究

—2年後の運動習慣と学士力関連スキルに着目して—

○中山正剛（別府大学短期大学部） 田原亮二（名桜大学）
丸井一誠（精華女子短期大学） 神野賢治（金沢星稜大学） 渡邊正和（福岡大学）

キーワード：学士力関連スキル，2年後調査，大学体育，運動行動

目的

大学生を対象とした体育授業研究では，体育授業がコミュニケーションスキルやリーダーシップに影響を及ぼすことや日常生活活動量を増加させることなどが明らかにされている（橋本ら，2009；西田ら，2009；木内ら，2005；2009）。また，中山ら（2011）は，2008年に中教審から提示された学士力に関連するスキル（以下，学士力関連スキル）と大学における体育授業の関係性について調査した結果，授業内における運動行動変容とコミュニケーションに関する介入が，コミュニケーションスキル，問題解決力，チームワーク，リーダーシップ（学士力関連スキル）と日常の運動行動に好影響を及ぼすことが示唆された。しかし，大学体育における介入研究の多くは，授業期間前後を比較することで効果を調査しており，その持続効果を示している論文は限りなく少ない。

そこで，本研究では，大学体育を通じた学士力関連スキルの向上と運動行動変容の効果が，授業期間が終了した2年後（以下，終了2年後）も持続するか否かを明らかにすること目的とする。

方法

1. 対象および調査時期

対象者は，1年前期に運動行動変容技法とコミュニケーションスキル向上を意図した介入授業を受けた3年生83名とした。調査は，平成25年12月に実施した。なお，本研究は，大学における倫理委員会の承認を得て実施されている（承認番号131103）。

2. 調査項目

データはすべてアンケート調査により抽出された。

内容として，徳永・橋本（2010）が作成したスポーツ特有のポジティブ特性尺度（ICSS）を援用し，「チームワーク」，「リーダーシップ」，「問題解決力（忍耐力）」を測定した。また，堀毛（1994）が作成したENDE2を使用し，「解読力，適切伝達力，統制力」から成るコミュニケーションスキルを測定した。加えて，現在の運動行動ステージ（Oka et al.（2000））と運動行動に関連する要因（以下，運動行動関連要因）である運動自己効力感，意思決定バランスから構成されている。

3. 介入内容

運動行動：歩数計を使って活動量を知る，授業時間内での歩数の目標設定，セルフモニタリング，認知的介入（健康情報提供），体育の宿題など

学士力関連スキル：ニックネームで呼び合う，ブラインドワーク，手つなぎ鬼，1分間ラリーなど

結果と考察

学士力関連スキルと運動行動関連要因の持続効果を明らかにするために，「授業開始時，授業終了時，終了2年後」のデータに対応のある分散分析を用いて調査した結果，運動の恩恵，チームワーク，リーダーシップにおいて2年後の持続効果が確認された。これらの結果は，運動行動変容技法とコミュニケーションスキル向上を意図した大学体育における介入授業の効果が，授業直後だけでなく授業期間が終了した2年後にも，一部ではあるものの持続していることが示唆された。

なお，本研究は平成25年度別府大学GP（研究支援）の助成を受けて行われた研究の一部である。

大学体育実技が学生の自己効力感・社会的スキルに 及ぼす効果について

○村山光義, 村松憲, 野口和行, (慶應義塾大学体育研究所)
東海林祐子 (慶應義塾大学総合政策学部)

キーワード：自己効力感, 社会的スキル, 授業介入

目的

近年, 大学教育に学生の成長に寄与するという視点が求められている。本研究は, 大学体育実技において社会的スキルの向上を意図したコミュニケーションの促進をはかるメニューを加え, 社会的スキル・自己効力感スコアの変化について検討を行った。

方法

1. 調査用紙

社会的スキルテスト (KiSS-18: 菊池 2007), 一般性自己効力感テスト (General Self Efficacy Scale: 以下 GSES) 及び自己プロフィールを含む構成とした。

2. 調査時期及び方法

調査は平成 23 年度の春学期 4 月下旬 (春学期の履修登録がほぼ確定した時期) および 6 月下旬~7 月上旬 (春学期の最終授業付近) の 2 回実施した。調査を実施した授業のうち, 社会的スキル向上を目指した授業メニューを実施したクラスをプログラム群, それ以外のクラスを一般群として比較した。

3. 分析

KiSS-18, GSES について, プログラム群と一般群でその変化を比較した。データの基礎的検討から, 各得点には年齢及び学年による違いがあり, 21 歳以上・第 3 学年以上の者は予め得点が高い傾向にあった。そこで, 18-20 歳以下の者を分析対象者とした。

4. 社会的スキル向上を目指した授業プログラム

プログラム群では, コミュニケーションづくりやグループワークを意識した内容として, 初期: アイブレイクを取り入れたウォーミングアップ, 中盤: グループワークを課題とした練習, 終盤: クラ

ス全体の相互作用 (リーグ戦・固定チーム) を利用したプログラムを取り入れた (以下の表参照)。

	バスケット	テニス	サッカー・フットサル
初期	・ペアになったのパス、ドリブル、シュートの基本練習 ・ツールインでのパス練習各種 ・ツールインでのシュート練習各種	・4人1組で様々なテーマでディスクッション ・2人1組で、1人が後ろからボールを出してもう1人が1バウンドさせてから打つ。お互いに感想を伝え合う ・2人1組で、1人がボール投げとサーブを行い、もう1人がその様子を観察し、お互いに感想を伝え合う	・パス&コントロール ・パス&ムーブ ・ドリブルシュート ・試合
中盤	・ウィングワーク/ポストワーク ・ギブ&ゴー/スクリーン・アウェー等、パスした後のポジション取りのためのドリブル各種 ・ドリブルへのあわせ: 2対0/2対1	・2人1組で、1人が後ろからボールを出してもう1人が1バウンドさせてから打つ。お互いに感想を伝え合う ・2人1組で、1人がボール投げとサーブを行い、もう1人がその様子を観察し、お互いに感想を伝え合う ・2人1組で、ボレー対ボレーを行う。相手がざりざり返せるくらいのスピードを出すようにする	・ポストシュート ・スイッチからのシュート ・ゴール前の2対1, 3対2 ・試合 (リーグ戦形式)
終盤	・スクリーンプレー ・カットスロー	・ダブルスのゲームを行い、終了時に自分自身のプレーについて感じたことを他の3人に伝える ・ダブルスのゲームを行い、終了時に他の3人のプレーについて感じたことを伝える	・セットプレー ・試合 (リーグ戦形式)

結果

KiSS-18 男子・女子, GSES の 1 回目の得点は, 両群間に有意差が認められなかった。しかし KiSS-18 男子, GSES では, プログラム群の 1 回目に対し 2 回目 が 1%水準で有意に向上した。また, プログラム群 1 回目と一般群 2 回目にも 1%水準で有意差が認められた。また, 2 回目増加得点は 1 回目低得点の者ほど増加が大きく, 統計的に有意であった。

考察

社会的スキル向上を目指した授業プログラムの実施は KiSS-18 男子, GSES において群内の有意な得点増加を導いた。KiSS-18 女子に差が認められなかったのは, プログラム群のサンプル数が不足した影響があったと考える。得点増加には 1 回目の低得点者への効果が大きかったことが要因の 1 つと考えられ, プログラムの介入は特に予め得点の低いものに効果的である可能性がある。今回の調査は, 体育実技が学生のメンタルヘルスの維持や, 積極的な社会参加に寄与できる可能性と, 授業内容の工夫によりその効果をより高められることを示唆している。

大学生の体格に対する自己評価と実際の体格について

○角田和彦, 星野宏司, 佐々木敏 (北星学園大学)

キーワード: 体格, BMI, 肥満度

目的

北星学園大学では, 学生が健やかに大学生活をおこなえるように, 低体重や過体重などのウェイトコントロールの必要な学生に対して保健師による指導がおこなわれている。指導の中心は, 自分自身にとって適切な体重を把握し, 体重をコントロールすることの重要性を理解させることにある。このような問題を持っていない普通の学生にとっても, 自分の適切な体格について理解し良好な体重を維持することは容易なことではない。

そこで本研究では, 本学学生の自分の体格に対する評価と実際の体格を比較し, 大学生の体格に関する意識を明らかにすることを目的とした。

方法

対象は, 2003年から2010年までの間に本学の体育実技を履修し, 入学時に18歳であった学生とした (n = 3567)。体格については, 質問紙による体格についての質問 (1「やせている」, 2「ふつう」, 3「太っている」) の回答を自己評価として用いた。また, 体格の指標として身長と体重からBMI (Body Mass Index) を算出した。

結果 および 考察

BMIによる肥満度の判定では, 男子は10.1%が低体重 (BMI 18.5未満), 12.2%が過体重 (BMI 25.0以上) に分類され, 女子は21.3%が低体重, 4.8%が過体重に分類された。男子は低体重と過体重ともに問題であるが, 女子は特に低体重への対応が重要であると考えられる。

図1に体格に対する評価ごとにBMIの度数分布を示した。「ふつう」と答えた群の平均BMIは, 男子21.8で, 女子19.7であった。男子の値は好ましいとされるBMIの値22.0に近いのに対し, 女子は低

体重の側に片寄っていた。「ふつう」と回答したなかの24.4%がBMIでは低体重と判定された。また, 女子で「太っている」と回答したなかで, BMIの判定も過体重に分類されたのは19.1%であった。女子は「やせ」に対する指向が強いと推察される。一方, 男子で「やせている」と回答したなかで, 64.7%はBMIの判定では標準体重に分類された。

自分の体格に対する評価とBMIによる判定が一致していたのは, 男子73.3%, 女子62.4%であった。男子の20.5%がBMIによる肥満度判定よりもよりやせていると自己評価し, 逆に女子の36.9%はBMIよりもより太っていると評価していた。

まとめ

女子学生のおよそ1/3が自分の体格を実際以上に太っていると自己評価していた。一方, 男子は, 女子と比較して, 適切に体格の評価をおこなっていた学生が多かった。大学生の男女で体格に対する意識の違いが明らかとなった。

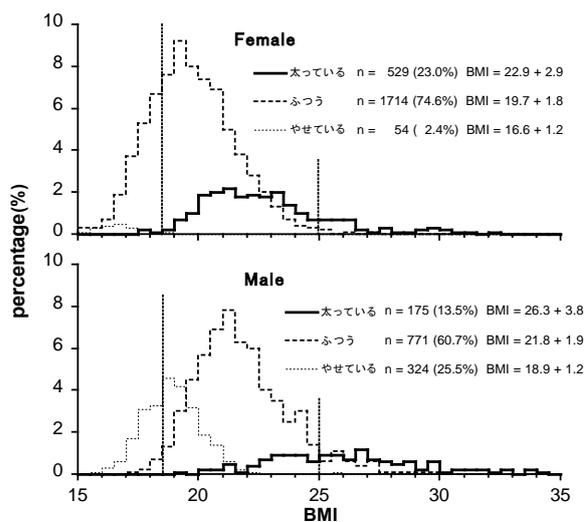


図1 体格に対する「やせている」, 「ふつう」, 「太っている」の評価ごとにBMIの度数分布を示した

大学体育授業時間内の歩数を効果的に増大させる方法の検討

-無作為割り付け介入試験-

○西脇雅人，木内敦詞，中村友浩（大阪工業大学）

キーワード：歩数計，初年次教育，一般教養，身体活動基準 2013，身体活動量

目的

本研究は，歩数計を用いた大学体育実技授業が受講者の授業時間内歩数をより効果的に高め得るか，否か，無作為割り付け介入試験によって検討し，大学体育授業時間内における身体活動量をより効果的に増大させる方法を開発・実践するために資する重要な基礎資料を得ることを目的として行った。

方法

159 人を授業のクラスごとに無作為に対照群と介入群に振り分け，欠席やデータ欠損がなかった対照群 43 人，介入群 62 人を解析の対象とした。両群ともにサッカーの授業時に歩数計を装着させ，それぞれ 4 回の授業を行った。第 1 回目の授業は歩数値のベースラインの測定として，両群ともに，歩数計のディスプレイをテープで隠し，学生が値を確認できないようにして歩数を計測した。対照群は全 4 回の授業において同様に歩数値を隠したのに対し，介入群の第 2 回目～第 4 回目（介入 1 週目～介入 3 週目）の授業では，学生が歩数値を授業中常時確認できるようにして，歩数と得点で試合の勝敗を決定する等，歩数や活動レベルを強く意識させ，競い合って活動量を増大させるように仕向けた。

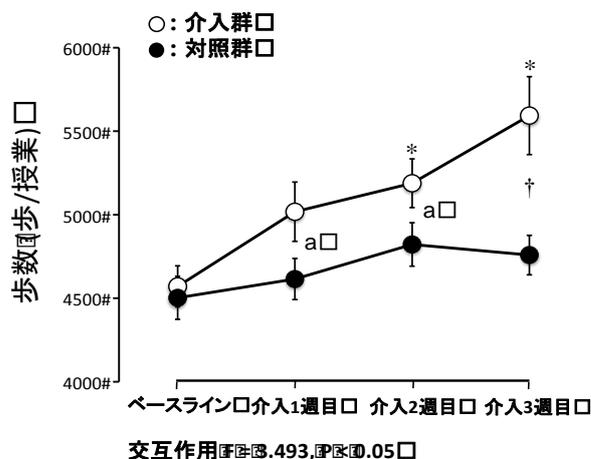
結果

対照群と介入群における身体特性（年齢，身長，体重，Body mass index）と質問紙で評価したサッカー経験年数に有意差はなかった。さらに，両群におけるベースライン時の授業の歩数データを比較すると，対照群の歩数は 4571 ± 129 歩，介入群の歩数は 4502 ± 123 歩であり，両者の間に有意差は認められなかった。対照群の歩数は経時的に有意な増減が認

められなかったのに対し，介入群の歩数はベースラインから徐々に増加し，介入 2 週目（ 5189 ± 130 歩）と介入 3 週目（ 5593 ± 119 歩）の値はベースラインに比して有意に高い値であった。介入 3 週目の歩数は，ベースラインから $26.9 \pm 4.1\%$ も増大していた。

考察および結論

大学体育実技授業時に歩数計を用いて歩数を計測し，歩数や活動レベルと試合の勝敗を関連させてこれらを強く意識させ，履修学生同士における歩数値の競い合いや励まし合いを誘起させると，受講者の授業時間内の歩数が顕著に増大することが明らかとなった。特に，健康づくりのための身体活動基準 2013 の「運動」の項目の基準値（1 週間に 4 メッツ・時の運動）として定められている身体活動量を週に 1 度の体育実技授業においてのみで充足可能にするという観点から，こうした本研究のような授業内歩数の増大は大学生の健康を維持・増進させるために非常に有益なことであったと考えられた。



*は Baseline との差が有意 ($P < 0.01$)，†は両群間の差が有意 ($P < 0.01$)，a は両群間の差が $P < 0.07$

FD 診断シート(個人版)による大学教養体育教員の実態調査

○小林勝法 (文教大学), 木内敦詞 (大阪工業大学)

キーワード: 教養体育, FD活動, 実態調査, 診断シート

目的

本調査の目的は, 大学教養体育の体系的FDプログラムを構築するための基礎的資料として, 体育担当教員のFD活動の実態を把握することである。

方法

調査は全国の大学と短期大学のうち, 中規模以上を対象とした。具体的には, 入学定員が 301 人以上の大学・校舎と入学定員が 251 人以上の短期大学とし, 472 大学・校舎と 98 短期大学を調査対象校とした。複数の体育担当教員が在籍する大学と短期大学のほとんどを対象としていると考えられる。

調査期間は 2013 年 3 月から 5 月であった。アンケート用紙を郵送し, 回答を依頼した。アンケート用紙は, 1 大学・短期大学について 3 枚送付した。回答用の封筒も 3 枚同封したので, 一つの大学から何枚回答されたかは把握できない。

調査項目は, 国立教育政策研究所が作成した「FDマップ」(2009 年)を参考にして体育用にアレンジした。全部で 25 項目で, 「教員の責務と倫理など」「所属機関の教育方針や教育環境など」「授業計画と教授法など」「FD活動(研修)」「FD活動(研究等)」に関するものである。各項目について, どれくらい実施しているかを 1~4 の 4 段階で回答を求めた。

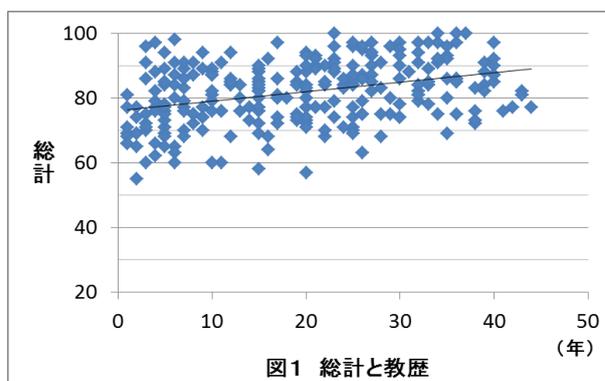
結果

回答者の職位別人数と比率, 教歴年数の平均値と中央値は表 1 の通りである。教授と准教授を合わせると 81.0%に達した。

	教授	准教授	講師	助教	助手	合計
人数	119人	103人	32人	18人	2人	274人
比率	43.4%	37.6%	11.7%	6.6%	0.7%	100.0%
平均値	27.5	15.9	8.8	4.7	4.5	19.3
中央値	27	15	6	5	4.5	20

25 の調査項目について, 4 段階で回答を求めている

ので, 総計は 25~100 の範囲に収まるが, 総計の平均値は 81.1 と高い。回答者ごとに総計と教歴年数をクロスした散布図は図 1 の通りである。調査項目は経験を尋ねるものが多いので, 総計とは教歴年数わずかに相関しており, 相関係数は 0.13 であった。したがって, 多くの項目で職位が高いほど, 回答の段階も高い傾向が見られた。特にFD活動については, その傾向が顕著に見られた。



特徴的な結果は以下の通りである。

- (1) 「今後のキャリア形成のイメージを持っている」との回答はどの職位でも比較的高くない。
- (2) 「大学体育に関する研究論文を読んだことがある」の回答は高いのに対し, 「書いたことがある」は比較的低い。
- (3) 「大学教育に関する学協会に個人会員として入会している」の回答は比較的低い。

考察

大学教養体育教員のFDの実態やニーズがおおよそ把握できた。職位段階ごとにどのようなFDプログラムが必要なのか, 検討を進めたい。

なお, FD診断シートはウェブサイト「教養体育FDプログラム」で公開している。



大学体育授業におけるバスケットボールの指導

- レイアップシュートの技能習得場面について -

○益川満治, 園部豊 (日本体育大学)

キーワード: 技能習得, 計量テキスト分析, バスケットボール

目的

筆者は, 大学において, 体育系学生及び一般学生を対象にバスケットボールの授業を担当している. クラブ活動の指導とは違い, 何をどのように学習させるかと日々考えさせられている. 両者で授業内容・達成目標の違いはあるが, 共通している点として, 試合において発揮できる基礎技能を習得することがある. 授業内には, 男子学生や女子学生, 初心者から熟練者等の技能レベルのバラつきも散見され, 基礎技能習得から応用技能又は戦術と同時に指導を行うことに, 日々頭を悩まされている. 特に, 初心者が試合の中で発揮する為の基礎技能習得に向けた指導に日々試行錯誤を繰り返している.

そこで本研究では, 大学体育授業におけるバスケットボール初心者が技能習得場面において, どういったことを難しいと感じるかを明らかにし, 初心者への技能習得過程の指導方法を検討する上での基礎資料を得ることを目的とした.



写真1 授業風景

方法

体育系大学の武道学科の学生 60 名 (男子 30 名, 女子 30 名) を対象とした.

表1 授業の概要

1回目	ガイダンス
2回目	シュート、パス、調査①
3回目	ドリブル、リバウンドetc
4回目	チェンジオブディレクション
5回目	ストップターン、ピボット、ディフェンスフットワークetc
6回目	個人戦術①
7回目	個人戦術②、調査②
8回目	グループ戦術①
9回目	グループ戦術②
10回目	ゲームを通して総合的学習①
11回目	ゲームを通して総合的学習②
12回目	ゲームを通して総合的学習③
13回目	ゲームを通して総合的学習④
14回目	実技テスト①、調査③
15回目	実技テスト②

本授業は, 表1に示した内容で進行した. 第2・7・14回目(計3回)の授業時に, 対象者に「レイアップシュートの学習場面で難しいと感じる点を書いてください」という質問に対し自由記述で回答させた. 分析には, データの抽出やその特徴の明示が容易であり, 分析の客観性が高いとされる計量テキスト分析(樋口, 2004)をフリーソフトウェアであるKH Coder Ver.2.Beta.30eを用いて行った. 得られたデータを形態素に分解した後, 出現頻度とクラスター分析の利用により概念関係を分類し要約することを試みた.

結果

1回目の調査結果を集計しクラスター分析を行ったところ, ドリブルからのキャッチのタイミングやステップにおける歩幅やゴールまでの距離感といった項目が多く見られた. なお, 2回目・3回目の結果及び考察は授業のビデオを含んだ内容で当日発表する予定である.

通信制大学における体育授業の実践と課題

○服部由季夫（星槎大学共生科学部）

キーワード：通信制大学，体育授業

目 的

星槎大学は2004年に開学した通信制課程の大学であり、共生科学部共生科学科のみの単科大学である。本年度で開学10周年を迎えるに至った。開学当初は専攻も、共生科学専攻のみであったが、現在は共生科学専攻、福祉専攻、初等教育専攻、スポーツ身体表現専攻の4専攻となった。スポーツ身体表現専攻では、通信制大学としては初めて中学、高等学校の保健体育教員免許の取得が可能で、2013年に専攻が開かれた。

星槎大学は通信課程のみの大学であるため、学生の平均年齢が今年度は37.2歳であるが、通常の大学と同様の授業の展開は不可能である。

通信制大学での体育授業の現状を報告し、より学生に有益な授業の展開について検討することを目的とした。

結 果

授業形態：体育の授業は、面接授業、即ちスクーリングのみとなるが、1日6時間以上に及ぶ。通常の大学で行われている海洋実習やスキー実習のような授業形態となる。

学生の状態：これまで履修した学生の年齢の幅は、18歳から65歳である。所謂発達障がいを持つ学生の履修はこれまでもあったが、身体障がいを持つ学生の履修はなかった。

履修の目的：体育の授業は必修ではなく、一般教養的な意味合いが強い。開学当初は、全くの興味、意欲で授業を履修している学生が多かったが、近年では履修している学生の多くは、教員免許法第66条の

6に対応する科目として、体育の授業に臨んでいる。つまり履修者の多くは、教員志望の学生である。

授業の進行：これまで授業を履修した学生数は、1授業あたり、最低で1名、最高で35名である。履修している学生数は開講の凡そ2週間前までは分からない。従って授業でどのような種目を行うかなどは、大まかには決めてはいるが、人数や年齢などが確定するまでは決定できない。

考 察

まず年齢層が広く、体力にも幅があるため、特定の種目を行うという予定を立てての授業展開は難しい。人数もギリギリまで判らない為、授業内容に関して、相当の幅を持たせて計画を立てておく必要がある。

体力的にも、履修している学生の間で相当の差があり、1日の活動時間や休憩時間等も適宜調整する必要がある。

学生の年齢層が高いことと、授業料を1単位当たりで納める為、授業に対する意識は高く、一つでも多くのことを学んで帰ろう、という意欲は強い。

学生は限られた時間と資本の中、覚悟を持って入学し、そして授業を履修している。様々な競技の面白さを伝え、体力増進に資することが、体育の授業の目的の一つではあるが、体育や身体活動の必要性や意味を伝え、学生の人生に有用な授業の展開を図る必要がある。現在、教員志望の学生の履修が多いが、全ての学生にとって有益な授業にしていく必要があると考えている。

大学体育における合気道授業の改善には何が必要か？

—受講生の自由記述による探索的検討—

○園部 豊（日本体育大学）

キーワード：合気道初心者、難しさ、計量テキスト分析

はじめに

筆者は、体育専攻生および一般学生を対象に、合気道の授業を担当している。特に、学生に何をどのように学ばせるかについては、試合がないという特徴を活かしつつ、授業改善のための最適な方法を探索的に検討しながら展開している。そうした中、学生は合気道のスキルに関わる「難しさ」に必ず直面する。特に学習の初期段階は、誰もがスキル獲得に困難を感じる。これらの問題は合気道をどのように学ばせるかといった側面であり、授業改善のための重要な課題である。以上の事からも、合気道のスキル獲得を妨げている「難しさ」を明確にすることによって、そこから得られた難しさを解消できるような授業展開の提案（武田，2012）が期待される。

そこで本研究では、大学体育における合気道授業の改善には何が必要なのかを、「難しさ」の側面から探索的に検討していくことを目的とした。

方法

対象者は、1 大学における合気道授業の受講学生男性 40 名を対象とした。なお対象者の所属学部には、体育専攻生および一般学生が混在していた。

第 6 回目の授業後に、対象者に「合気道で難しいと感じる点を自由に書いてください」という質問に対して、自由記述を求めた。分析には、データの抽出やその特徴の明示が容易であり、分析の客観性が高いとされる計量テキスト分析（樋口，2004）を、フリーソフト KH Coder Ver. 2.Beta.30e を用いて行った。得られたテキストデータから最も多く出現していた単語を抽出し、出現パターンの類似した単語の共起の程度を視覚化する共起ネットワークを描いた。

結果と考察

2 語以上出現した単語を対象にして共起ネットワーク（図 1）を描いた。特徴的なものとして、「足」「間合」「方向」「表（技）」「裏（技）」などが多くの単語とのネットワークを有していた。これらは、合気道の身体の使い方に関する「難しさ」を示している可能性があり、授業改善のためのヒントとなった。

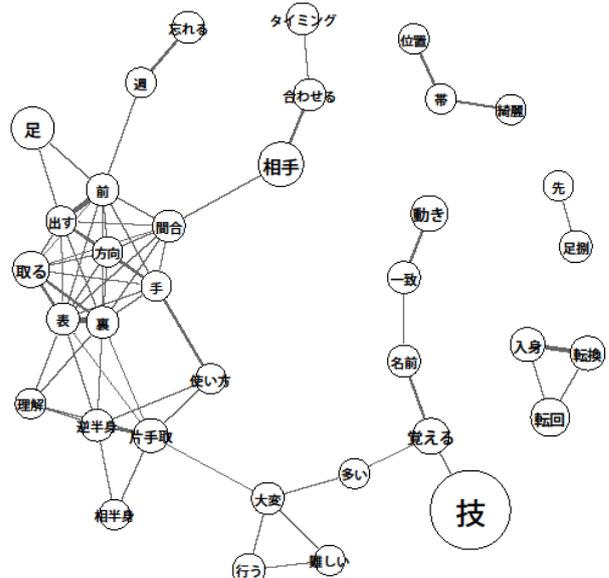


図1 合気道の「難しさ」におけるネットワーク



写真1 授業風景

スノーケリングを利用した水泳授業のプログラムと効果について

初心者から競泳部までの属性による比較検討

○遠矢英憲, 田原亮二 (名桜大学)

キーワード: スノーケリング, 水泳指導, 泳力向上, 10 分間泳

はじめに

マリンスポーツが盛んな沖縄県の特徴を活かし、本学ではスノーケリングを利用した水泳授業を共通教育として開講している。本報告では初心者（留学生）から上級者（競泳部）までの泳力向上に関する授業効果について報告する。

方法

1. 授業の概要

平成 25 年度名桜大学全学対象前期（4 月～7 月）共通体育Ⅱ「基礎水泳」において、クロール泳を基礎的泳法としながらも水泳を広い概念で捉え、沖縄において盛んなスポーツダイビングと事故予防のための安全水泳能力向上の内容を含んだ計 15 回の授業を行った。

第 1 回 Orientation（座学）

第 2 回～第 6 回 Stroke Correction（クロール泳）

第 7 回～第 10 回 Sport Diving（スノーケリングおよびスキダイビング）

第 11 回～第 15 回 Rescue（自己保全および他者救助＜平泳ぎを含む＞）

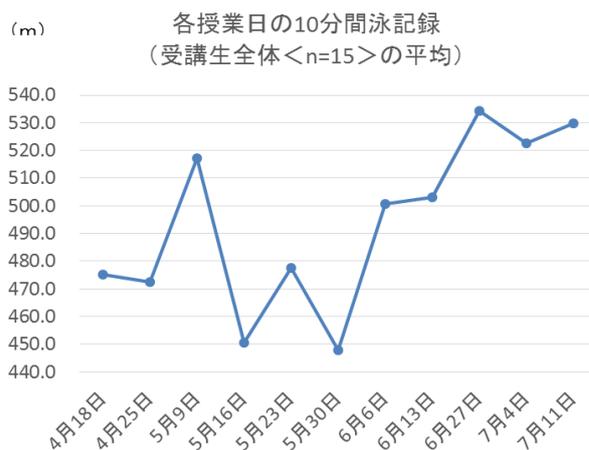
本授業においては、第 4 回～第 15 回までの授業において積極的にスノーケリング 4 点セット（マスク、スノーケル、フィン、浮力体）を使用して授業展開を行った。これらの道具が泳力向上に与える基本的効果として、マスクは鼻に水が入ってこないこと、スノーケルは息継ぎしなくてもよくなるためその他の動きに集中できること、フィンは水を捉える感覚が分かり易くなること、速いスピードで泳ぐことができること、下半身が沈みにくくなることにより基本姿勢を維持しやすくなること、浮力体は楽に浮く

感覚を捉えやすくなること、野外フィールド（海、川、湖沼等）の安全管理における浮力体の効果について体験を通じた理解を得られることが挙げられる

2. 泳力の把握

本授業においては 10 分間泳記録によって泳力把握を行った。10 分間泳は、毎回の授業の最後に行い、泳法をクロール泳もしくはウォーキングに限定した

結果



受講生 15 名全体の 10 分間泳記録平均は、初回 475.2m、各学生の最長記録 552.5m であり、77.3m の伸びが見られた。また、初心者について、水泳の授業を受講することが全くの初めてという留学生（中国）2 名の記録平均は初回 285.0m、最長記録 387.5 m と 102.5m の伸びが見られた。さらに、競泳部に所属する上級者 5 名の記録平均は、初回 702.6m、最長記録 740.0m と 37.4m の伸びが見られた。

まとめ

スノーケリングを積極的に利用した全 15 回の水泳授業において、全くの初心者である留学生から競泳部所属の上級者まで泳力の向上が認められた。

大学体育授業を通じた自己への気づきを促す方法論の開発

～アイスブレイクの利用～

○飯田路佳、清水文子（十文字学園女子大学）、田中安理（専修大学）、
多田五月（帝京大学）、伊東泰子（日本体操研究所）

キーワード：体育授業、アイスブレイク、グループワーク、社会人基礎力

目的と背景

18歳人口の減少とともに、大学の使命は近年変化してきており、「研究、教育、社会貢献」に加え、「学生のキャリア形成、職業教育の対応等」ますます「大学体育」の役割が重要となっている。中でも「ライフスキル」や「生きる力」、「コミュニケーション力」などを育成する場としても可能性があると考え。

近年、担当授業を通じて、自信を持たない学生が多いと感じることが多い。グルーピングの際も知らない人とのコミュニケーションを避け、希望していない種目を履修せざるを得ない低いモチベーションの学生もみられる。

これらの流れから、大学体育授業を通じた自己への気づきを促す方法論の開発は急務であると考え、独自に実践している、大学生としての知的好奇心やポジティブシンキングを得ることにつながる「自己への気づきを目的としたアイスブレイク」に焦点を当て、その実践事例を紹介することを目的とする。

授業事例

1) クラス概要

対象：1クラスは30～40名。男女混合クラスも女子のみのクラスもある。

単位：1学期15回 1単位

種目：「ダンス」、「一般体育」（種目フリー）

内容：①集合、挨拶 ②ゲーム（5分） ③グルーピング（3分） ④グループワーク（含発表8分） ⑤ウォーミングアップ（15分） ⑥当

日の種目内容（45分） ⑦クーリングダウン（10分） ※今回は②、③、④をまとめて「アイスブレイク」と位置づける。また、②、③、④は順番が前後、または状況により省かれることもある。

2) 具体例

ゲーム：ドンケツ、叩いて防いでジャンケンポン、ジャグリング、手繋ぎ相撲…

グルーピング：名字の上から2番目のアイウエオ順、名前の一番下のABC順、大学から遠い順、誕生日の日付順…

グループワーク（本日のお題）：大学に期待すること、夢、最近気になる時事問題、もし今自分（彼女）が妊娠したら、お祭りの屋台でお勧めの一品、今気になる有名人、最も感動した映画、最近一番涙したこと、他己紹介（右隣の人の第一印象をできるだけ具体的に）…

まとめ

当日はこれらの具体的な分類とともに、授業振り返りシートの学生の反応なども含め、紹介する。また、学生生活自体や何気ないことなど、これまで考えてこなかったことを自覚し、興味を持つことが、好奇心の入り口であることを伝えることで変化がある学生は必ず存在する。それらを休退学防止へ繋げ、議論のきっかけとなれば幸甚である。それらの議論を踏まえ、より充実した授業展開を推し進めることで、大学体育の地位向上にも貢献して行きたい。

テレマークスキーの指導に関する教材の作製

○佐々木敏, 角田和彦 (北星学園大学), 佐藤徹 (北海道教育大学岩見沢校)
古市竜太 (マウンテンガイドコヨーテ)

キーワード: テレマークスキー, 教材の作製, ゲレンデから登攀スキー

目的

テレマークスキーは近代になってスキーのビンディングが開発された際に歩くことと同時に滑ることが出来るように Norheim, S. (Norway) によって開発されたと言われている (Patrick D. et al. 2003). つまり, 踵が上がることに, スキーに対して一つの自由度を持つことによるスキー操作への幅の広さが生じている. 特に柔らかい雪でのスキー滑走では, 前後に脚を開いた位置を取るために, 前後の安定性を確保しやすいと言われている. また, 踵が上がることによるバランス保持に対する必然的な動きとも言える. このテクニックはオスロでのクリスチャニアに対してテレマーク地方のスキーテクニックと言うことでテレマークスキーテクニックと言われるようになった. 踵が上がることの利点を利用したスキーの技術は, 最近少しずつその数を増やしている. 北海道支部でもこれに取り組んで 8 年程の研修会を重ねてきている. そこで, この指導に関する学習過程を整理し, 多くの人にその技能の習得を容易とすることを目的に教材作製を実施した.

方法

ニセコグランヒラフスキー場を中心として山廻りから連続ターンおよび, 応用編として新雪でのスキーを体系化した. それぞれの技能のつながりをビデオに収め, 指導された古市先生のコメントを提示して作製を進めた. 指導者は古市竜太先生. カメラは角田和彦, 学習者は佐々木敏と佐藤徹とした. 技術的な学習の手順に沿って記録し, パワーポイントにより学習できるように作製した. また, 操作はパラレル操作を基本とした.

結果

1. 前後のバランスの取り方
2. バランスを保持してスキーを操作する.
3. 直滑降および斜滑降からの山回り
4. 回転のバリエーションとして前に出した脚の踵を浮かせるヒールアップターンの導入. 後方の脚にも確り加重を分散させる.
5. 谷回り: 前後のスキーの切り代えで前脚のインエッジと後ろ脚のアウトエッジに確りと乗り込むことで安定した回転を獲得する.
6. パラレル操作での連続ターン
7. 緩斜面から急斜面までをカバーできるようにする. パラレル操作を意識する.
8. 新雪などでの応用練習を体験する

考察

現代のスキーでは最近の傾向として, オーストリーの Bshophshophen にて発生押したスノウボードを含む多様な楽しみ方が提案されている. テレマークのスキーは踵が浮く利点を生かして, 登攀して滑走する人達に広く愛されてきている. 今後のスキーの楽しみ方の一つとして大学教育でも取り入れるべき点多いと考えられる. 用具を含めて今後考えなければならないことは多いが, スキー文化の継承という点でも見るべき点多いと考えられる. ここではそういう視点でテレマーク教材を御覧頂き議論できればと考えている.

文献

Patrick D. et al. (2003) ,Telemark Skiing, Meyer & Meyer sport,

ロシア武術システムを教材とした 大学体育の授業が心身に与える影響について

○小山陽平（茨城キリスト教大学 非常勤講師）

キーワード：ロシア武術システム、授業展開、学習の成果、

1. 緒言

大学新入生を対象とした調査から、高校までの体育授業で学習したことが、生活のなかで意味を持ち健康をもたらす生活行動に具現化されていないという報告がある（則元ら、2009）。

また、大学生共通の背景として“自己不確実感”や“不全感”が挙げられ、これらの問題を抱える学生の多くは、大学生活への適応に困難を抱える傾向にあるという（山田・天野、2002）。

これらの報告に挙げられている問題に対し、大学の体育授業が果たせる役割があるのではないかと、というのが本稿の出発点である。

本発表では、上述した問題に対するロシア武術システムを教材とした体育授業の可能性を報告するものである。

2. システムの特性

ロシア武術システム（以下、システム）とは、ロシア諸国の伝統的な武術や健康法を現代武術として昇華させたものである。2007年に国連本部から『現代においてもっとも人間的な武術』と評価されたこともあり、現在では武術愛好家や軍事従事者だけでなく、教育やスポーツ現場、医療現場等にも活用されはじめている。

システムでは『破壊の否定』が根本原理である。トレーニングやさらには態度によっても、自分自身や相手の肉体や精神を破壊しないことが求められる。

システムのトレーニングでは他の武術のようにきまったカタ（型・形）を学ぶことはない。全てのワークなかで、4原則である「呼吸し続けること」「リラクゼーションを保つこと」「良い姿勢を保つこと」

「動き続けること」に徹することによって、自分自身を知り、肉体と精神の緊張を解消し、自分に合った自然な動きを身に付けていく。

3. 授業展開のポイント

筆者が担当する茨城キリスト教大学2013年度開講科目体育実技『ボディメンテナンス』において、システムのトレーニングを導入した。授業展開のポイントは下記のとおりである。

①自らの心身の状態に気付く

ワーク中の心身の状態を感じとるよう指示した。また心理尺度（MCL-S2, Face Scale）や自由記述の学習カードを用いて、授業前後に心身の状態をチェックさせた。さらに心身に影響を与えた要因について考察させた。

②フィジカルトレーニング

プッシュアップ・スクワット・シットアップ・レッグレイズ4種目を毎回の授業で取り入れた。筋力向上を目的とするのではなく、「呼吸の大切さを知る」「疲労からの回復」を主な目的とした。

③ペアワーク・ペアマッサージ

他者と関わるなかで、他者の心身の状態を感じとるよう指示した。これは「他者に関心を持つ」「他者を思いやる」ことをねらいとした。また他者と関わるなかで生じる肉体的・精神的ストレスに気付かせ、ストレス対処法や解消法について学習することもねらいとした。

④学期末レポート

授業を通して気付いたこと、またその気付きから学んだことについて自由記述の回答を求めた。

授業展開および学習の成果の詳細は当日発表する

大学ゴルフ授業における家庭学習教材開発の試み

○橋口剛夫（帝京科学大学）、北徹朗（武蔵野美術大学）

キーワード：ゴルフ授業，家庭学習，技能評価

目的

受講生がより効率的に教育的効果を得るための試みとして、学生自身の運動動作映像の評価をホームワークとして取組ませ、自己の現状を把握し、運動への理解を深めさせるという授業実践を試みたいと考えた。本研究では、受講生各人の運動動作映像データを準備し、ホームワークとして学生に自分自身の動作映像を分析・評価させることが、運動メカニズムの理解や運動技能向上に寄与するかを検討するとともに、大学ゴルフ授業における本方式の恒常的導入の可能性を探ることを目的とした。

研究対象と実践方法

研究対象は、A大学においてゴルフ授業を履修した男子学生6名であり、授業前半にプレテストおよび動画撮影を実施し、撮影の翌日以降にDVDに収録した動作映像と、家庭学習（セルフチェック）のためのチェックノート配布した。受講学生6名のうち、課題を提出し前後のスウィングテストを受けることが出来た4名を本稿では分析の対象とした。チェックノートには、アドレス（5項目）、テークバック（2項目）、バックスウィング（6項目）、トップ（4項目）、ダウンスウィング（3項目）、インパクト（4項目）、フォロースルー（6項目）、フィニッシュ（4項目）について解説し確認・評価できるようにした。ノート提出後に、実技テストを実施し技能評価を試みた。課題前後の実技テストは、ショートアイアン（ピッチング）で10球打たせ、その飛距離と左右のブレについて計測するものであった。受講生には運動動作を評価・分析させ、決められた期日までにチェックノートを提出させた。また、2回目のショットテスト後に「ゴルフの技術全体を通して技

術的に難しかったのはどんな点か」についても調査した。

結果

課題を提出後、受講生にアンケート調査を実施した。4名中2名が自分が思い描いていた運動動作イメージと実際を比べて「イメージと異なった」と回答した。また、課題に取り組んだことによるフォームの改善について4件法で回答を求めたところ、全員が「やや改善されたと思う」と回答した。提出されたチェックノートは教員により確認され、誤解もしくは更なる改善が必要な場合には個別にアドバイスを与えた。

家庭学習課題の取組前と取組後にショットの正確性および飛距離テストを実施した。その結果、課題取組後のテストにおいて、4名中3名において、飛距離の平均値が伸び、左右のブレの平均値が短縮した。3名のうち1名については、左右のブレにおいて、実技テストのデータに有意な差 ($p < 0.05$, paired t-test) が認められた (表1) (表2)。

表1. ホームワーク前後の「飛距離 (平均値)」の比較

学生	ホームワーク前	ホームワーク後	有意差
T.N.	16.04m	14.43m	n.s.
W.T.	19.76m	20.49m	n.s.
I.T.	16.85m	17.24m	n.s.
A.Y.	12.82m	14.84m	n.s.

表2. ホームワーク前後の「ブレ (平均値)」の比較

学生	ホームワーク前	ホームワーク後	有意差
T.N.	1.82m	3.35m	n.s.
W.T.	10.09m	2.62m	$p < 0.05$
I.T.	1.93m	1.88m	n.s.
A.Y.	6.18m	3.99m	n.s.

参考文献

- ・北徹朗，橋口剛夫，小山慎一（2014）大学ゴルフ授業におけるホームワークの試み，体育研究 48号（印刷中）

身近な素材を利用した ゴルフスイングづくりのための教材作成の提案

○高橋宗良(杏林大学), 北徹朗(武蔵野美術大学), 松林幸一郎(亜細亜大学)

キーワード: ゴルフ, スイングづくり, 教材

I. はじめに

体育系科目においてゴルフが実施される背景には、社会性の涵養, およびマナーの習得といった, 単なる運動の機会としての効果に留まらない教育効果が期待されているものと考えられる。一方で, ゴルフ用具は高価であり, ゴルフを体育系科目の教材として採用することができないケースも少なくない。

そこで, 本報告では, 大学体育におけるゴルフの教材化の更なる促進のため, 身近に存在する様々なものを利用したゴルフの教具づくりを提案することを目的とした。

II. 教具の作成方法

(1)ホース

材料は水道ホースおよびテーピングテープである。ホースを 1.0m の長さに切断し, ホース先端にテーピングテープを巻く。ビニールテープでも代用可能であるが, 糊でベタつくことがある。

(2)ホース+テニスボール

材料は水道ホース, 硬式テニスボール, および結束バンドである。ホースは(I)同様 1.0m の長さに切断する。

次に, 硬式テニスボールに 2 カ所穴を空け, 片方の穴にホース先端を差し込む。テニスボールに差し込んだホース先端は折り曲げた後, 結束バンドで固定し, 再びテニスボール内に収める。

なお, ホースとボールを確実に固定するため, ホースを差し込むテニスボールの穴はホース直径より小さくする。

(3)グラスファイバー

材料はビニールハウス用グラスファイバーとテーピングテープである。グラスファイバーを 1.0m の長さに切断し, 一方の先端にテーピングテープを巻き(先端部), もう一方の端にテーピングテープを巻く(グリップ部)。

なお, グラスファイバー切断面には「ささくれ」ができるため, 注意が必要である。

III. 使用方法

ホース, ならびにホース+テニスボールを用いたスイングでは, いずれもテイクバック時には左肘を, フォロー時には右肘を伸ばさないと, 胸あるいは背中にホース先端が当たる。一方グラスファイバーを用いたスイングでは, 「ビュッ」という空気を切る音の発生ポイントによって聴覚的にフィードバックできる。また, いずれの教材も, 先端のテーピングの白色, あるいはテニスボールの黄色が残像として残るため, スイング軌道の再現性を高めることができる。

なお, 以上の教材に用いた素材は, ホームセンターなどで, 数セット分を数百円程度で購入することができる。さらに使用済みのものを再利用することによってさらにコスト抑制することができる。

以上より, 本報告で作成した教材は, 非常に安価であることに加え, 触覚, 視覚, 聴覚によるフィードバックができるため, ゴルフの中核的課題であるスイングづくりに有益な教材であると考えられる。

身近な素材を利用した教具の自作と授業実践

－フライングディスク授業の一例－

○北徹朗（武蔵野美術大学）

キーワード：フライングディスク授業，教具づくり，授業事例

はじめに

著者らは，過去に紙製のフライングディスクの有効性について検証し，フライングディスクを用いた授業のカリキュラムの可能性について言及した．紙ディスクの作成は学生自身に行わせているが，1個あたりの製作費は15円程度である．紙製のため軽く，滞空時間が長いので，授業の導入段階では扱いやすい教具であると言える．また，先行研究ではアルティメットゲームにおける運動強度・運動量ともに市販ディスク使用時よりも優れていた¹⁾²⁾．本報告では，身近な素材を利用した教具の自作と授業実践の一例を報告する．

授業スケジュールと到達目標

授業は概ね以下のスケジュールで実施された（表1）．第1回目授業では，前半に授業の概要やフライングディスクの基本的事項を学習し，後半にグループに分かれ，新聞紙・厚紙・ビニールテープを利用して次週以降に使用する紙ディスクを製作する（図1）（図2）．2回目以降は天然芝グラウンドにて実施し，1) スローの基本，2) 近距離への正確なスロー，3) 遠くへの正確なスロー，4) キャッチアンドスロー，5) 動きながらのキャッチアンドスロー，といった動きの獲得を目指して授業を展開している．



図1. グループ活動



図2. 学生が作成した教具

表1. 授業のスケジュール

第1回	オリエンテーション、グループで紙ディスクの製作
第2回	バックハントスローの基本と練習
第3回	サイドアームスローの基本と練習
第4回	スロー大会(1)
第5回	スロー大会(2)
第6回	アキュラシー
第7回	ディスクゴルフ(1)
第8回	ディスクゴルフ(2)
第9回	ディスクゴルフ(3)
第10回	ガッツ
第11回	ドッジビー、ゴールドッジ
第12回	アルティメット(1)
第13回	アルティメット(2)
第14回	アルティメット(3)
第15回	授業のまとめ

身近な素材を利用した自作教具の一例

アキュラシー： ゴールは，100円ショップで購入した園芸用ポールと付属のネットを繋ぎ合わせ自作した．ネットの目はディスクをキャッチするには丁度良いサイズである（図3）．

ディスクゴルフ： 教場の都合上ラインパウダーが使用できないため，ターゲットゾーンを荷紐（半径4m）で示し，ホール札を前述の園芸用ポールとラミネートフィルムでパックした番号を養生テープ貼った.9ホールを設定しゲームを実施している（図4）．



図3. アキュラシーのゴール

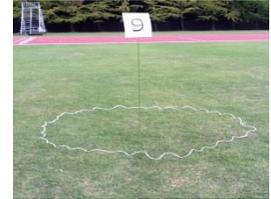


図4. ディスクゴルフ

参考文献・参考資料

- 1) 教育新聞記事『フライングディスクで運動量向上 武蔵野美術大の北徹朗専任講師らが開発』教育新聞，2013年5月16日（4面／授業デザイン）
- 2) 北徹朗ら（2012）『子どもの体力向上を目指した教具の開発と評価』臨床スポーツ医学，29(2)，pp.223-227

フライングディスクを用いた「キャッチビー」の紹介

○神田亮（別府大学短期大学部）

キーワード：フライングディスク，キャッチビー，チームワーク

目的

新学習指導要領の平成24年度完全実施に伴い、中学校保健体育科の指導内容のうち、球技(ゴール型)の一つの種目例としてフライングディスクを使ったアルティメットが取り上げられている。フライングディスクを用いた活動の利点として、一つの教材でディスクドッジなど様々な活動が可能で、非常に取り組みやすく誰でも安全・簡単に始めることができるスポーツであると言える。

本研究では、筆者が命名した「キャッチビー」の授業実践について紹介する。

方法

共通科目(教養科目)である「保健体育A」の授業において、15コマの内、フライングディスク(ドッジビー)を用いた授業を5コマ設定した。

表1. フライングディスクを用いた授業

1コマ目	ディスクドッジ①
2コマ目	ディスクドッジ②(王様, 隠れ王様)
3コマ目	ゴールドッジ
4コマ目	キャッチビー①
5コマ目	キャッチビー②

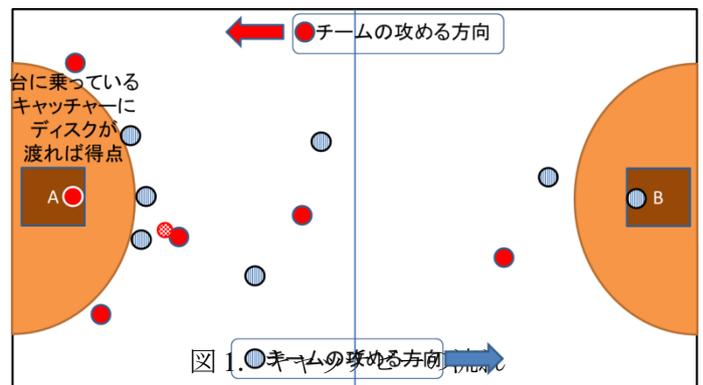
1) キャッチビーの利点

ディスクの飛ばし方や、風の影響を受けるなどの偶然の要素が重なり男女差がなく行え、コートを自陣と相手コートとを往復するため身体活動量も多くなる。ディスクを仲間に渡し、ゴールを目指すだけなので得意不得意の差が出にくい。

2) キャッチビーの説明

1 チーム6, 7人で実施。ルールはポートボールに類似し、ボールの代わりにフライングディスクを用

いる。ディスクを持った者は3歩以上歩けない。両チームともに入ることができないゾーンがあり、その中にキャッチャーが乗る台がある。台の上に乗っているキャッチャーにディスクが渡れば得点となる。



結果および考察

フライングディスクによるディスクドッジを導入とし、身体活動量の増加やチームワークでの活動を目的としたキャッチビーを考案し、授業で展開した。参加学生の反応も良く、取り組みの姿勢も良かった。また、参加した学生を対象にディスクドッジ・キャッチビー・ゴールドッジをしてみたの感想を、「5. とても楽しい, 4. そこそこ楽しい, 3. 楽しい, 2.それほど楽しくない, 1. 楽しくない」の5段階で尋ねたところ、ディスクドッジ 4.41 ± 0.67 , キャッチビー 3.76 ± 0.73 , ゴールドッジ 3.48 ± 0.68 となり、種目それぞれに大きな差が見られた。キャッチビーに対する自由記述では、「皆で協力するので楽しい」「団結できるので楽しい」「今までしたことが無かったので楽しい」という感想がある反面、「パスが回らないと楽しくない」「走るのが大変」という感想もあり、ルールやゲームの展開をさらに工夫する必要性が感じられた。

大学体育実技における学生の意識調査

— 初回授業と最終授業との比較 —

○浅井泰詞（桐蔭横浜大学 非常勤講師），高野千春（平成国際大学），
賤機徳彦（桐蔭横浜大学），田中幸夫（東京農工大学），村上秀明（桐蔭横浜大学）

キーワード：学生の意識，大学体育，健康教育

目 的

大学における保健体育の教育効果は，身体面，精神面，社会性・コミュニケーション面等において，効果が実証されている．本研究では，大学生の体力・健康意識や体育実技授業における意識に着目し，体育実技の受講前と受講後との関連について検討した．

方 法

1. 調査対象

前期において体育実技Ⅰを受講した学生 144 名（男子 112 名，女子 32 名）を対象とし，分析を行った．質問紙による調査を 2 回行い，1 回目は初回授業時に，2 回目は最終授業時に実施した．

2. 調査項目

学生の体力，運動技能，健康，運動に対する意識について，初回時に 4 項目，最終時に 8 項目の質問を行った．いずれの項目も，「肯定」「普通（または，変わらない）」「否定」の 3 段階評価法で回答を得，肯定を 3 点，普通を 2 点，否定を 1 点とし，得点化した．

体育実技の授業に対する意識について，34 項目の質問を行った．各質問項目につき，「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「思わない」「全く思わない」の 5 段階評価法で回答を得，強い肯定を 5 点，強い否定を 1 点とし，得点化した．

結 果

1. 学生の体力，運動技能，健康，運動に対する意識について

「現在，体力があるか」という質問において，初回時に比べ最終時には，「体力がある」が 21.8%から

36.1%に増加し，「体力がない」が 45.4%から 30.3%に減少した．平均スコアは，初回時 1.76 から最終時 2.06 となり，有意に高くなった ($P<0.05$)．「この半年で，体力がついたと思うか」という最終時の質問において，「体力がついた」は 41.2%，「かわらない」は 49.6%，「体力が落ちた」は 9.2%であった．

「現在，運動するのが好きか」という質問において，「好き」は初回時 65.5%，最終時 72.3%，「普通」は初回時 25.0%，最終時 19.6%，「嫌い」は初回時 9.5%，最終時 8.0%であった．平均スコアは，初回時 2.55 から 2.66 となり，高くなる傾向がみられた．

「この半年で，運動に対する考えは変わったか」という最終時の質問において，「以前より好きになった」は 92.8%，「かわらない」は 7.2%，「嫌いになった」は 0.0%であった．

2. 体育実技の授業に対する意識について

初回時と最終時の平均スコアにおいて，「命令に従う人間を作りやすい」では 1.47 から 1.29，「運動不足が解消できる」では 4.34 から 4.10 とスコアが有意に低くなり ($P<0.05$)，「時間数が少ない」では 3.38 から 3.72 とスコアが有意に高くなった ($P<0.01$)．

考 察

半年で体力がついたと感じている学生が 4 割を超えており，週 1 回の体育実技でも定期的に行うことで，体力に自信がつくことがうかがえた．また，授業時間が足りないという意識が高くなり，さらに運動不足を解消できるという意識が低くなったことから，十分な運動時間および運動頻度の設定を検討することも必要であると考えられる．

大学・短期大学における障害学生に対する体育実技の現状と 支援に関する取り組みについて

○栗原浩一，及川力，天野和彦，香田泰子，中島幸則（筑波技術大学）

キーワード：大学体育，障害学生，教育支援，教育関係共同利用拠点，アダプテッドスポーツコーディネーター

1. はじめに

日本学生支援機構の調査では、平成24年度に高等教育機関に在籍する障害学生数は11,768人で、平成19年度の5,404人と比較すると、この5年間でほぼ倍増しており、その教育支援の必要性がますます高まっている。

筑波技術大学は聴覚・視覚障害者を対象とする我が国唯一の高等教育機関であり、中でも障害者高等教育研究支援センターは、障害者高等教育に関する全国的な拠点としての役割を期待され、文部科学大臣による「教育関係共同利用拠点」認定制度のうち、障害者高等教育拠点として位置付けられている。事業内容として、全国の大学・短期大学（以下、大学など）で学ぶ聴覚・視覚障害学生及び障害者教育に関わる教職員を対象に、情報支援技術の提供や教育方法・教育資源の共有および教職員への研修や情報提供など様々な活動が実施されている。本事業の取り組みの一環として聴覚・視覚障害学生の体育実技に対する支援を行っており、これまでの取り組みと今後の計画について報告する。

2. 障害学生に対する体育実技に関する現状

全国の大学などに在籍する、障害のある学生に対する体育実技の現状把握および事例収集を目的とした「障害学生に対する体育実技に関するアンケート」を実施した（発送数：1140校，回答数：364校，回答率：31.9%，回収期間：平成24年4月1日～5月31日）。体育実技における障害学生の受け入れ体制に関する結果として、「学校として障害学生の受け入れに不安がある」の回答が42%、「教員個人として障害学生の受け入れに不安がある」の回答が66%で

あった。その理由として、教員の障害者スポーツについての「情報不足」、「指導技能・経験の不足」などの回答が、学校・教員個人に共通して多く見られた。障害者スポーツに関する情報入手については、83%の教員が「入手の必要がある」と回答し、その入手先として期待するものについては、「講習会」「映像資料」「インターネット」「書籍」の順に多く見られた。また、実際に指導経験があると回答した教員は39%であり、これらの指導事例の内、指導体制は、「担当教員が一人で行った」との回答と、「受講中の健常学生が補助」との回答が多く見られ、大部分が教員単独の指導体制であることが明らかになった。

これらの結果から、障害学生に対する直接的な支援だけでなく、体育教員への支援も必要であることが示唆された。

3. 障害学生に対する体育実技に関する支援

これらの調査結果に関わる内容として、本事業では以下の取り組みを実施あるいは計画している。①大学教員や、将来の教員となる教育学部・体育学部の学生を対象とした、聴覚・視覚障害者スポーツに関する講習会の開催・講師派遣、②依頼先大学に応じた、聴覚・視覚障害学生の体育授業に関する相談・助言・支援、③先述した調査結果や支援事例のウェブサイトでの公開、聴覚・視覚障害者スポーツを紹介する映像資料の作成等、聴覚・視覚障害学生の体育・スポーツ活動に関する情報の収集と提供、④これらの事業を担当する、特に視覚障害者スポーツに高い専門性を有する人材である、アダプテッドスポーツコーディネーターの育成と活用。

障害者スポーツに対する女子学生の意識に及ぼす影響

～専攻学科および運動経験の関係について～

○角南良幸（福岡女学院大学），鍵村昌範（健康支援研究センター），
下園博信（九州共立大学）

キーワード：障害者スポーツ，質問紙，専攻学科，運動経験，女子学生

目的

大学体育に障害者スポーツを導入するに当たって、大学生を対象にした障害者スポーツに関する意識調査が行われてきており、専攻する学部学科によって障害者スポーツに関する意識が異なる可能性が報告されている。しかし、これらの報告のほとんどが男女込みの調査であり、教育系学科については検討されていない。女性の方が障害者に対する関心や援助意欲が高いことや、スポーツを通じた社会的価値ある行動が高いことなどから、女性独自の検証をする必要がある。一方、教育系学科では、介護等体験や障害者理解に関する科目が設定されており他学科に比し特質的な部分も多い。さらに、体育系学生の特長についても報告されているが、実際の運動経験との関係については検討されていない。そこで本研究では、大学体育に障害者スポーツを有効に導入していくための基礎資料として、人文系、幼児教育系、体育系学科に所属する女子学生を対象に、障害（者）および障害者スポーツに関する意識調査を行い、専攻学科および運動経験の関係について検討を行った。

方法

対象者は、福岡県内のF女子大学の幼児教育系学科学生99名、人文系学科89名、K大学スポーツ系学科56名の女子大学1年生計244名である。永浜・藤村（2011）が実施した障害（者）および障害者スポーツに関する意識に関する質問紙調査を行い、因子分析を用いてそれぞれの下位尺度を決定した。その後、学科間および運動経験（中高運動部所属）の有無で比較検討を行った。

結果

障害（者）に関する意識尺度は、特に「障害者へのネガティブイメージ」、「障害による日常生活困難感」の2因子、障害者スポーツに関する意識尺度は「障害者スポーツ実施に対する効果認識」、「障害者スポーツ実施への心配」、「障害者スポーツ実施に対する配慮の必要性」の3因子が抽出された。

多重比較の結果、体育系は「障害（者）へのネガティブイメージ」、「障害による日常生活困難感」および「障害者スポーツ実施に対する効果認識」が低値を示し、幼児教育系は「障害（者）へのネガティブイメージ」、「障害による日常生活困難感」、「障害者スポーツ実施への心配」および「障害者スポーツ実施に対する配慮の必要性」が高値を示した。しかし、「障害者スポーツへの興味・感心」では、専攻学科間に有意な差は認められなかった。また、運動経験の有無による比較では、「障害（者）へのネガティブイメージ」、「障害による日常生活困難感」で中高運動群が有意な低値を示し、「障害者スポーツへの興味・感心」で中高運動群が有意な高値を示した。

考察

体育系は障害者へのネガティブイメージは低いが自身の経験から強く激しい運動でないと効果が薄いと感じている可能性が高く、一方、幼児教育系は専門知識の獲得で障害者スポーツの実施に慎重になっていることが示唆された。これらの結果から、専攻学科特性を考慮しながら、実際に障害者スポーツを体験することによって、その有効性や安全性について理解を深めていく重要性が示唆された。

ワークショップ

2 日目：10:00～12:00（剣道場）

『iPad を大学体育実技で使ってみよう』

～動画の運用方法と動作の評価～

発表者：田原 亮二（名桜大学）

【プログラム】

第 1 部

大学体育授業に利用できそうな iPad アプリケーション・周辺機器の紹介[30 分]

1. フィードバックに利用できるアプリケーションの紹介（Ubersense）

昨年度もワークショップで取り上げ好評だった Ubersense がバージョンアップされたので、復習も兼ねて紹介します。

2. iPad とデジカメを繋ぐ機器の紹介（Eye-fi）

iPad のカメラは非常に優秀ですが、デジタル(ビデオ)カメラと比較すると性能的には劣ります。ここではカメラで撮影した動画をワイヤレスで iPad に転送できる周辺機器について紹介します。

3. iPad と PC を繋ぐアプリケーションの紹介（Photosync）

iPad で動画撮影を多用していて直面する問題に保存容量の問題があります。iPad と PC の間で動画ファイルを円滑に移動させる方法を紹介します。

4. 質疑応答

第 2 部

iPad を使って動作を評価する[90 分]

1. 大学体育の目的と動作を評価することの関係

2. 動作を評価する手法とその手順

3. スポーツ動作の評価をしてみよう（グループワーク）

4. 成果発表

5. 質疑応答

【お願い】

1. カメラ付きの iPad を所有している方はご持参ください（iPhone, iPod touch も可）。

2. あらかじめ「Ubersense」のソフトをインストールしてご参加いただけると助かります。こちらはフリーソフトとなっております。

分析モードの説明



UberSenseの操作方法

1

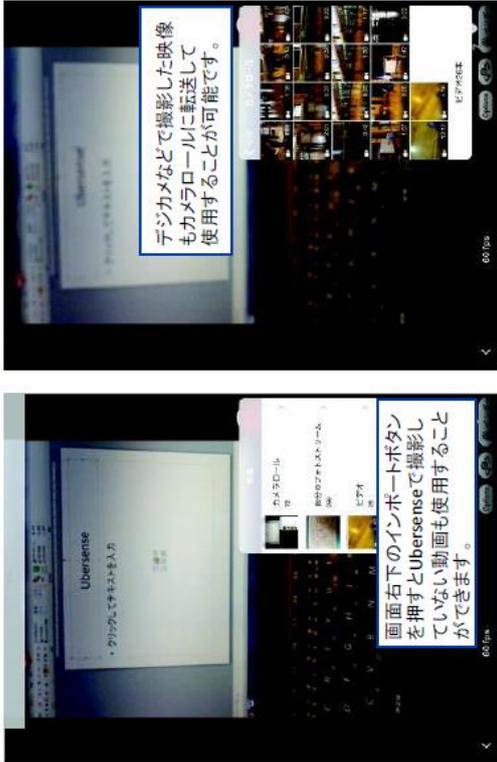


2



4

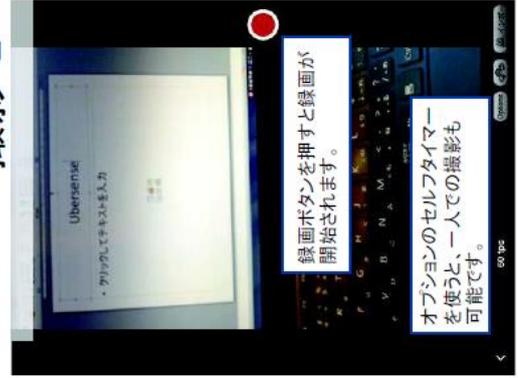
動画のインポート



映像の比較

5

外部機器からの画像転送



撮影モードの説明

8

PhotoSyncを使用する方法



機能

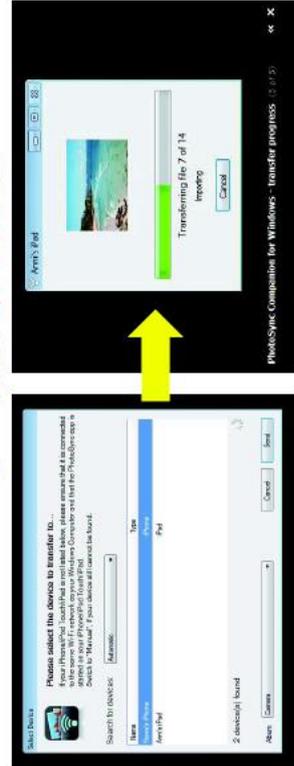
PCに保存されている映像をワイヤレスでiPadに転送することができる。

使用方法

PCとiPadが無線LANに繋がっている状態で、PC画面上にあるアイコンに転送したい映像をドラッグ & ドロップするだけ！

11

外部カメラ画像のインポート PhotoSyncを使用した方法



使用方法

iPadでアプリを立ち上げ、待機状態になっていると、PCで転送先が表示されるので、選択すると映像がカメラロールに転送されます！

12

wi-fi機能付きSDカード を使用する方法



価格 4980～9980円

9

Eye-fiの設定方法

スマホかんたん設定手順

1. カメラ
通常のSDHCメモリーカードと同様の取り扱いのように、お使いのデジタルカメラに Eye-Fi Memory Card を挿入します。
>>>対応機種一覧はこちら
2. モバイル端末
スマホやタブレットなどのWi-Fi設定をONにします。
※お使いのモバイル端末が「設定」メニュー「Wi-Fi」を起動している。
3. 専用アプリ
スマホやタブレットなどに好きなiOS / Androidのアプリストアに無料の専用アプリ「Eye-Fi」をダウンロードします。
App Store / Google Play / Kindle Fire.
4. コードを入力
Memory Cardにはいい感じのカード番号の裏に印刷されている10桁のコードを入力します。
※すべてのカードに異なるコードが付与されています。よくごさいようにお読みください。



<http://www.eye-fi.jp/products/mobi>

10

ラウンドテーブル

2月28日（金）13:30～14:30

【剣道場】

RT1：教育・スポーツ施策

【体育館 104 教室】

RT2：ICT 利用授業開発

【身体運動文化実験室】

RT3：オリンピック・パラリンピック

【体育館 103 教室】

RT4：キャリア開発

【柔道場】

RT5：運動部活動指導

<RT1> 教育振興基本計画に準じた大学体育の役割と課題

企画者：丸井 一誠（精華女子短期大学）、中島 寿宏（北海道工業大学）
話題提供者：丸井 一誠（精華女子短期大学）、パク ジョンヨン（神田外語大学）
司会者：丸井 一誠（精華女子短期大学）

【背景】

平成 25 年 6 月付に教育基本法の規定に基づき、第 2 期の教育振興計画（以下、本計画）が閣議決定された。

本計画は教育基本法の理念を踏まえ、多様性を尊重しつつ、「自立」「協働」「創造」を基軸とした生涯学習社会の構築に向けて各般の施策を推進している。

本計画の第 1 部（総論）では第 1 期計画の評価や東日本大震災の教訓を踏まえ、我が国を取り巻く危機的状況の回避に向けて「1. 社会を生き抜く力の養成」、「2. 未来への飛躍を実現する人材の養成」、「3. 学びのセーフティネットの構築」、「4. 絆づくりと活力あるコミュニティーの形成」といった、生涯の各段階を貫く教育の 4 つの基本方針を設定している。

第 2 部（各論）では PDCA サイクルが機能するよう明確な 8 つの成果目標と成果指針を設定し、その成果目標の実現を実施するための具体的かつ体系的な 30 の基本施策を示している。

【目的】

大学体育に関わる教員として本計画を踏まえて、運動・スポーツを通じた教育活動を行っていくことが適切であると考えられる。

本ラウンドテーブルでは、本計画に示された基本的な方向性や概要を基に、大学教育における運動・スポーツを通じた取り組みについて情報交換を行い、運動・スポーツを通じた大学教育について再考することを目的とする。

【進行方法】

- ①本計画の基本的な方向性や概要を確認する。
- ②大学期における運動・スポーツを通じた教育活動と関連する成果目標と基本施策を提示する。
- ③現在行われている運動・スポーツを通じた教育活動の事例を紹介する。
- ④グループディスカッションにて、各人が取り組んでいる運動・スポーツを通じた教育活動や位置付けについて情報交換してもらう。
- ⑤大学期における運動・スポーツ活動の役割や課題について総括し、運動・スポーツ活動の教育的価値、現状や課題について共有する。

【問題提起・課題検討】

- ①各大学の現状に応じた運動・スポーツ活動の取り組みと位置付け
- ②教育情報の共有化
- ③教育効果の明確化
- ④グループディスカッションにて生じた課題

<RT2> 大学体育の ICT 利用授業開発

企画者：北 徹朗（武蔵野美術大学）、安部 久貴（東京工科大学）、高橋 宗良（杏林大学）、橋口 剛夫（帝京科学大学）、田原 亮二（名桜大学）、岡田 光弘（国際基督教大学）、小林 勝法（文教大学）

話題提供者：村瀬 浩二（和歌山大学）、安部 久貴（東京工科大学）

司会者：北 徹朗（武蔵野美術大学）

モデル校に導入されている ICT ネットワーク

生徒 PC には iPad(34 台)と Android 端末(15 台)があり、体育授業では電子黒板と生徒 PC を用いていた。電子黒板は教育コンテンツ配信サービス「EduMall」（ウチダシステムソリューション）のコンテンツを学校ライセンスで購入しており、保健体育科では Edumall 内の「器械運動」などのコンテンツを使用していた。

授業での ICT の活用事例

まず初めに、中学校における器械運動の授業を例に個人スポーツ種目における ICT の活用法について説明する。器械運動の授業では、電子黒板を用いて Edumall 内のコンテンツを例示することによって課題提示をする一方で、iPad を使用して自分の技の省察および生徒同士の協働学習を行っていた。

この授業の最後には各自ができる技を組み合わせる連続技の発表をする時間が設けられており、発表に向けて生徒達は自分の演技を練習していたが、その際自分が挑戦したい技を Edumall の動画から選択し iPad で視聴していた。また、グループ内の生徒同士で互いの演技を撮影し合い、撮影した演技と参考にした動画の動きと見比べることで自身の演技の長所や短所を確認していた。加えて、iPad を用いてグループ内の生徒同士の演技を撮影する過程において、互いの演技を観察する時間ができたことから、演技に対する討議が発生し生徒間での協働学習を促進する効果もあった。さらに、生徒自身で自分の動きを確認できることから「先生、見て見て!」といった生徒からの声が減り、巡視や生徒の補助など教師の授業マネジメントを充実させる効果もあった。

続いて、中学校におけるバレーボールの授業を基に集団スポーツ種目における ICT 活用法について例示する。バレーボールの授業においても器械運動同様に、電子黒板を用いた課題例示と iPad を使用してグループでの技術・戦術の省察が行われていた。バレーボール授業の特徴的な iPad 使用方法は、試合中の映像を撮影する際に撮影者に気づいた点をコメントさせていた点である。こうすることによって、生徒同士での省察時における客観的視点の提示が可能になっただけでなく、教員が各生徒の戦術理解度を推定することが可能になった。

以上、簡単にではあるが義務教育機関における ICT 利用を例示した。ラウンドテーブル当日はこの内容について詳細に説明し、それを踏まえて参加者の各所属大学で行われている体育の授業にどのように ICT を取り入れることができるかについて意見交換をしていきたい。



<RT3> オリンピック・パラリンピックと大学体育

企画者・司会者：師岡 文男（上智大学）

話題提供者：真田 久（筑波大学），嵯峨 寿（筑波大学）

指定発言者：舛本 直文（首都大学東京）

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定した。これから開催まで6年と5カ月間、学生が否応なく強い影響を受け、また終了後も一生覚えているであろうこのメガイベントを前に我々大学体育人は、どのように体育教育の中で扱い、またどのように研究していけば良いのか、永年オリンピック教育の研究・実践を続けてこられたオリンピック・アカデミー理事の真田久先生と嵯峨寿先生（共に筑波大学）に事例を基に提言をいただき、世界のオリンピック教育と研究に精通しておられる舛本直文先生（首都大学東京）に海外事例を紹介いただいた後、参加者の皆さんと共にブレインストーミングを行ないます。

【話題提供者：真田 久（筑波大学）】

2020年東京オリンピック・パラリンピック招致では、全国86大学が東京都および東京オリンピック・パラリンピック招致委員会と連携協定を結び、各大学で講演会、シンポジウム、オリンピックやパラリンピアンを招いてのトークショーなどが行われた。86もの大学がオリンピック・ムーブメントに積極的に関わったのは始めてであり、この流れを拡大していくことは、オリンピック・ムーブメントにとって極めて重要であると考えられる。

来年の2014年、中国の南京にてユース・オリンピックゲームスが開催され、2018年に韓国の平昌、そして2020年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催され、東アジアでのオリンピック開催が続く。オリンピック・ムーブメントそのものも時代とともにイノベーションされていて、国際開発としてのオリンピック・ムーブメントはもはや主要な要素の1つとして位置付けられている。そのような折、東アジアおよび日本から発信できるオリンピック・ムーブメントを各大学が模索しながら社会へ発信していくことは、大学の重要な使命ではないかと思う。

【話題提供者：嵯峨 寿（筑波大学）】

2003年より全学学生を対象に「オリンピック」に関わる講義中心のオムニバス授業を始めた。「総合科目」と称される必修選択の教養教育である。11年分のシラバスを紹介し、授業計画立案や評価といった授業運営に関わる実状を中心に、開講の動機・理念、これまでの足跡、手応えなどを報告する。

また、五輪開催による恩恵は東京に限らず全国に広まるようにしたい。私たち大学体育関係者は今度の五輪を機に、いかなるレガシーを標榜したらよいだろうか。個人的には、2019年に日本で開催されるラグビーW杯を視野に、双方の価値を活かした相乗効果の実現に期待したい。オリンピズムに通ずるラグビーの「ノーサイドの精神」は、試合後における対戦チームどうしの交流会「アフターマッチファンクション」となって、また、そのための「クラブハウス」のような社交空間となって表われている。前回の東京五輪以後、運動人口、運動場は増えたが、地域のスポーツライフにおけるアフタースポーツ、プレススポーツを彩る文化と環境は育ってきただろうか。交流文化・社交環境の形成につながる体育授業とは大学でどう展開できるものだろうか。ノーサイドの精神とオリンピズムが、教養の理念やコミュニティスポーツに革新をもたらす可能性があるとするれば、W杯と五輪の日本開催は、大学体育関係者が大学改革と地域活性化に大きく貢献するチャンスになるだろう。

<RT4> 教員のキャリア開発プログラム体験ワークショップ

企画者：奈良 雅之（目白大学）

話題提供者：奈良 雅之（目白大学）

司会者：奈良 雅之（目白大学）

1. はじめに

大学教員が研修等によりその資質・能力を維持・向上させることは大学教育の質保証という点で重要である。その手段としてのファカルティディベロップメント（FD）活動は、2008年からその実施が義務化されており、その内容は、授業改善・開発を目的としたものが多く実施されている。

一般的にFD活動は、教育改善・開発に限定してとらえられがちであるが、有本章が『大学教授職とFD』（2005年、東信堂）において、研究、教育、社会貢献、管理運営といった業務の遂行能力の向上をねらいとする研修活動についてもFD活動に含まれるという、広義のFD概念を提唱してから、授業改善・開発の範囲を超えた、幅広い専門的・汎用的能力の育成・向上が取り扱われるようになってきた。しかしながら、現時点では、職階とともに変化する大学体育教員の業務全般に対する研修機会はきわめて少ない。

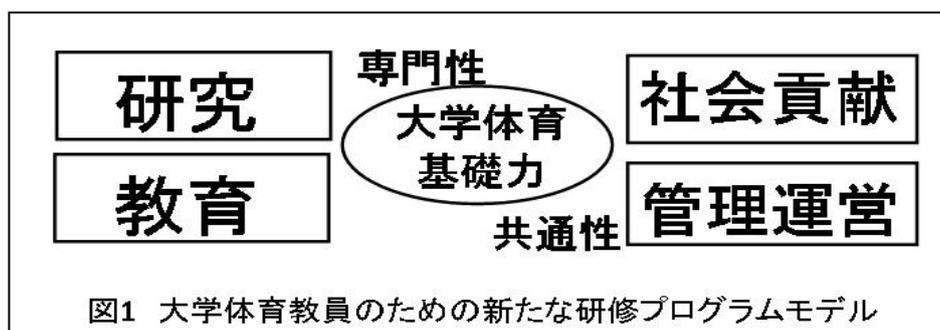
FD活動は、大学の質を保証するための取り組みであるといえるが、教員個人の視点からみたとき、その能力開発・向上は、大学教員にとってのキャリア形成ととらえなおすことができると考えられる。

そこで本企画では、大学体育教員のキャリア形成に必要な資質・能力を獲得向上させる研修プログラムのあり方や方法について話し合ってみたい。

2. 研修プログラムの検討

そのための題材として、図1のモデルを提案する。

このモデルは、広義のFDの領域（有本章、大学教授職とFD 2005、東信堂）を参考に作成した研修プログラムのモデルであり、研究、教育、社会貢献、管理運営の4領域の能力がスポーツ健康に関する専門性と汎用性技能（共通性）に基づく「大学体育基礎力」に支持されるという構造をもつものである。



3. 研修プログラムモデルに基づくワークの体験

さらに、ここでは、この研修プログラムモデルに位置づけられると考えるワークの一つを体験していただき、それに基づく意見交換を実施し、内容を深めてみたい。

ワークの内容は、職場等で体験した仕事上の出来事・行動に焦点を当てて省察を行うものである。このワークは、個人で実施可能であることから、定期的の実施し、結果を自己分析することが可能である。

4. 総括

以上の内容を踏まえて、大学体育教員のキャリア形成に必要な資質・能力を獲得向上させる研修プログラムのあり方や方法について討議する。

<RT5> 大学における運動部活動の課題

企画者：高橋 宗良（杏林大学），小林 勝法（文教大学），北 徹朗（武蔵野美術大学），
中山正剛（別府大学短期大学部）

話題提供者：野田 耕，四方田 健二（九州共立大学），高橋 宗良（杏林大学）

司会者：高橋 宗良（杏林大学）

（公社）全国大学体育連合は、スポーツ指導における体罰・暴力を根絶させ、日本国民が普くスポーツ文化を享受することを目指し、「運動部活動での指導のガイドライン」（文部科学省、2013年）を用いた共同研究を行った。共同研究のテーマは、(1)大学生の体罰や暴力に対する意識や実態を把握するための調査、(2)大学生に対して体罰・暴力問題を認識させるためのワークショップの2つのテーマである。

本研究への参加大学数、および回答者数（2013.12.19現在）は、研究テーマ(1)では、大学数は15校であり、回答者数は2700名を超えた。また研究テーマ(2)では、大学数は1校であり、参加者数は112名であった。

研究テーマ(1)の調査の結果、スポーツ経験を有する学生の半数程度は体罰を受けたことのある学生であった。また体罰は法で禁じられているものの、時と場合によっては必要であるとする学生が存在していた。しかしながら、体罰を一部容認していた学生が、研究テーマ(2)のワークショップを通じて体罰をしてはならない理由を理解し、体罰以外の方法によるスポーツ指導の必要性に気がついたことが示された。また、そのためには指導者（教員）と選手（学生、生徒）の間に日常からの十分なコミュニケーションをとることに加え、指導的立場にある者の言葉による伝達力の向上が必要であるとの感想が挙げられた。

以下は、本ラウンドテーブルにおける説明者である九州共立大学スポーツ学部による調査結果のまとめである。

「運動部活動等における体罰・暴力に関する調査を終えて」

九州共立大学スポーツ学部

本学でこの調査に参加した学生は、教職課程履修者計675名である。また、大学で部活動を行っている学生は6割(412名)にも上る。これはスポーツ学部という特性から、他大学と比較すると高い値である。大学までスポーツ活動に取り組んできた背景には、小・中・高の部活動時代を支えた、多くのスポーツ指導者達の存在がある。自分が受けた指導に対する感謝の気持ちが、彼らを教職へと導いていると考えられる。実際にスポーツ指導者願望をもった学生は、全体の56%であり、部活動を行っている学生とほぼ同じ割合であった。

しかし残念なことに、体罰を受けた経験のある学生は、全体の4割にも上った。時期は、中学、高校が大半を占め、運動部活動と体罰問題の根の深さを伺わせる結果であった。部活動は、競技スポーツの指導のみにとどまらず、人間教育にも及ばざるを得ないため、礼儀や規律を重視する方法のひとつとして、体罰が利用されてきた可能性がある。実際のコメントをみると、「規則をやぶったから」「禁止されていた行為があったから」という理由で体罰を受けた学生がいた。一方それ以外の理由で、体罰を受けた学生がいるのも事実であった。

ただ、指導上の体罰は不必要だと答えた学生は、半数を超えており、自身が体罰を受けていても、それをしてはいけないという認識が芽生えていることが伺える。本学の教職課程では、体罰に関する講を設けている。体罰・暴力を回避するためにはどうしたらよいか、学生、教員ともに取り組んでいきたい。

本ラウンドテーブルでは、体罰・暴力に関する共同研究の調査結果およびワークショップの結果を紹介した上で、スポーツ指導における体罰・暴力問題について掘り下げて検討する。

全国大学体育連合 研究委員募集

大学体育および本連合の発展に必要な研究を推進するために、「大学体育関連情報調査チーム」が設置されています。毎月、マンスリーレポートを発行し、教育やスポーツに関する行政の動向のほか、大学体育に関する文献や学会・研修会などの紹介をしています。また、大学体育研究フォーラムの企画と運営をします。そのメンバー(研究委員)を公募します。

研究課題は今のところ以下の4課題とし、課題ごとに研究班を組織しています。

- ① 教育・スポーツ政策研究(教育振興計画やスポーツ基本計画、中教審審議状況など)
- ② カレッジインパクト研究(卒業生や4年生、大学新入生対象調査など)
- ③ 課外スポーツ活動支援
- ④ 大学体育のICT利用授業開発

研究委員を希望される会員は、上記から希望する課題(複数可)を選び、その課題番号と氏名、所属機関名(郵便番号、住所、電話番号)、e-mailアドレス、専門領域を事務所(info@daitairen.or.jp)にお知らせください。

なお、運営に当たっては今のところ下記の通りとしています。

- ① 研究会は原則としてオンラインによるものとする。
国が運営している新世代研究基盤サービスのReaD & Researchmapを利用していますので、登録していない人はアカウントを取得してください。
- ② 研究費は原則として自弁とする。
- ③ 研究費の必要が生じたときには、本連合の研究助成や科研費などに応募する。

「大学体育学」投稿規定

公益社団法人全国大学体育連合 「大学体育学」投稿規定

1. 本誌は、高等教育機関における体育の実践への貢献を目的として、刊行する。本誌に投稿できるのは、公益社団法人全国大学体育連合(以下「この法人」という)の会員のほか、本誌の趣旨に賛同する者とする。
2. 原稿の種類は、大学をはじめとする高等教育機関における体育の実践への貢献を目的とした「総説」「原著論文」「研究資料」「事例報告」とし、完結した未刊のものに限る。ただし、学会等で口頭発表した内容を充実させたもの、各種研究助成金の交付を受けた研究報告を論文の形式にまとめたもの、発表済みの結果であっても新たな観点から再考察したものは投稿できる。
 - 1) 総説: 高等教育機関における体育に関連する知見を体系的にまとめたもの。
 - 2) 原著論文: 高等教育機関における体育に関連する新たな知見を提示するものであり、目的、方法、結果、考察、文献などの体裁を整えてまとめたもの。
 - 3) 研究資料: 高等教育機関における体育において実践上価値があると認められる客観的な資料を提示するものであり、原著論文に準じた形式でまとめたもの。
 - 4) 事例報告: 高等教育機関における体育に関連した事例について観察・考察などしているもの。
3. 審査の上、原稿の採択および掲載の時期は、本誌編集委員会において決定する。
4. 本誌に掲載された原稿は、原則として返却しない。
5. 原稿は、原則としてワードプロセッサで作成するものとし、A4判横書きとする。投稿票を表紙として添えて、第1ページには表題を明記し、3行空けて本文、注・引用・参考文献、図表の順に通し番号をつけて記す。投稿票はA4 版縦長に横書きとする。投稿票には、まず、「総説」「原著論文」「研究資料」「事例報告」の種別と表題、著者所属機関名、著者氏名、キーワード3～5語、連絡先住所・氏名、電話番号、FAX 番号、電子メールアドレスを明記する。次に、英文表題、著者所属機関名(英文)、著者氏名(英文)、キーワード(英文)を明記する。
6. 投稿料は著者全員が会員の場合は無料とし、非会員が第一筆者あるいは共著者として投稿する場合は、1編に付き1万円を支払うものとする。また、掲載料については、会員は無料とするが、非会員の場合は有料とする。その場合、刷り上がり1ページあたり3千円とし、共著の場合は、共著者の会員・非会員の割合に応じて支払うものとする。
7. 「総説」「原著論文」の原稿は、原則として1篇につき、図表等を含めて刷り上がり10ページ以内(1ページは約1722字)とし、それ以外の原稿は図表等を含めて刷り上がり8ページ以内とする。規定のページ数を超えた場合は、1ページあたり3千円を著者が負担する。
8. 図や表は、直接印刷できるような鮮明なものとし、それぞれ必ず通し番号とタイトルをつける。郵送の場合は1枚ずつ台紙に貼り、本文とは別に番号順に一括する。図表の挿入箇所は、本文原稿に数行間隔を空け、そこに朱書きによって指示する。
9. 注をつける場合は、該当する箇所の右肩に1) 1,2) などのように通し番号をつけて、巻末文献リストの

前に一括してその番号順に記載する。

10. 文献の記載は著者・出版年方式とし、本文中及び文献リストは原則として以下のとおりとする。

1)本文中における文献の記載は、著者・出版年方式とする。

例:奈良他(2000)は、1997 年度に…。

2)文献リストは、著者名のABC順に並べ、本文の最後の一括する。書籍等の場合は、著者名(発行年)題名、(編集者名、『書名』). 発行所:発行地、ページp.またはpp.の順とする。雑誌等の場合は、著者名(発行年)論文名、誌名、巻(号):ページp.またはpp.の順とする。

例①:中村 誠・鈴木正三(1987) 正課体育の検討、((社)全国大学体育連合編、『大学生の体力テストハンドブック』). 道和書院:東京, pp.1-5.

例②:奈良雅之(2003) ストレスへの気づきを促す健康科学教育,大学体育, 29巻3号, pp.101-105.

11. 著者による校正は原則として1回とする。

12. 掲載論文の抜刷を希望する場合は、著者校正のときに、その必要部数をゲラ刷の表題のページに朱書きする。但し50部までは無料とし、50部を超える費用は投稿者の実費負担とする。なお、筆頭著者には掲載誌2部を贈呈する。

13. 掲載論文の著作権は、この法人に帰属することとし、以下のとおりとする。

1)著作権は原則として自分の論文等の全文またはその一部を複製あるいは翻訳などの形で他の著作物に利用できる。全文複製にて他の著作物に利用する場合、著作者はその著作物の中で本誌に掲載された論文等の利用であることを明記しなければならない。

14. 投稿論文は下記に送付する。電子メールによる送付の場合は添付ファイル名と使用ソフトウェア名を記載する。郵送による送付の場合は正本とそのコピー1部の計2部とする。

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-3-13第2天台ビル303号 公益社団法人全国大学体育連合事務所

TEL:03-3232-5738 FAX:03-3232-5872

MAIL:info@daitairen.or.jp

15 本規定の改廃は、常務理事会にて行う。

附 則

本規定は、平成15年6月14日より適用する。

本規定は、平成18年4月1日より適用する。

本規定は、平成20年9月19日より適用する。

本規定は、平成24年2月6日より適用する。

本規定は、平成25年7月26日より適用する。